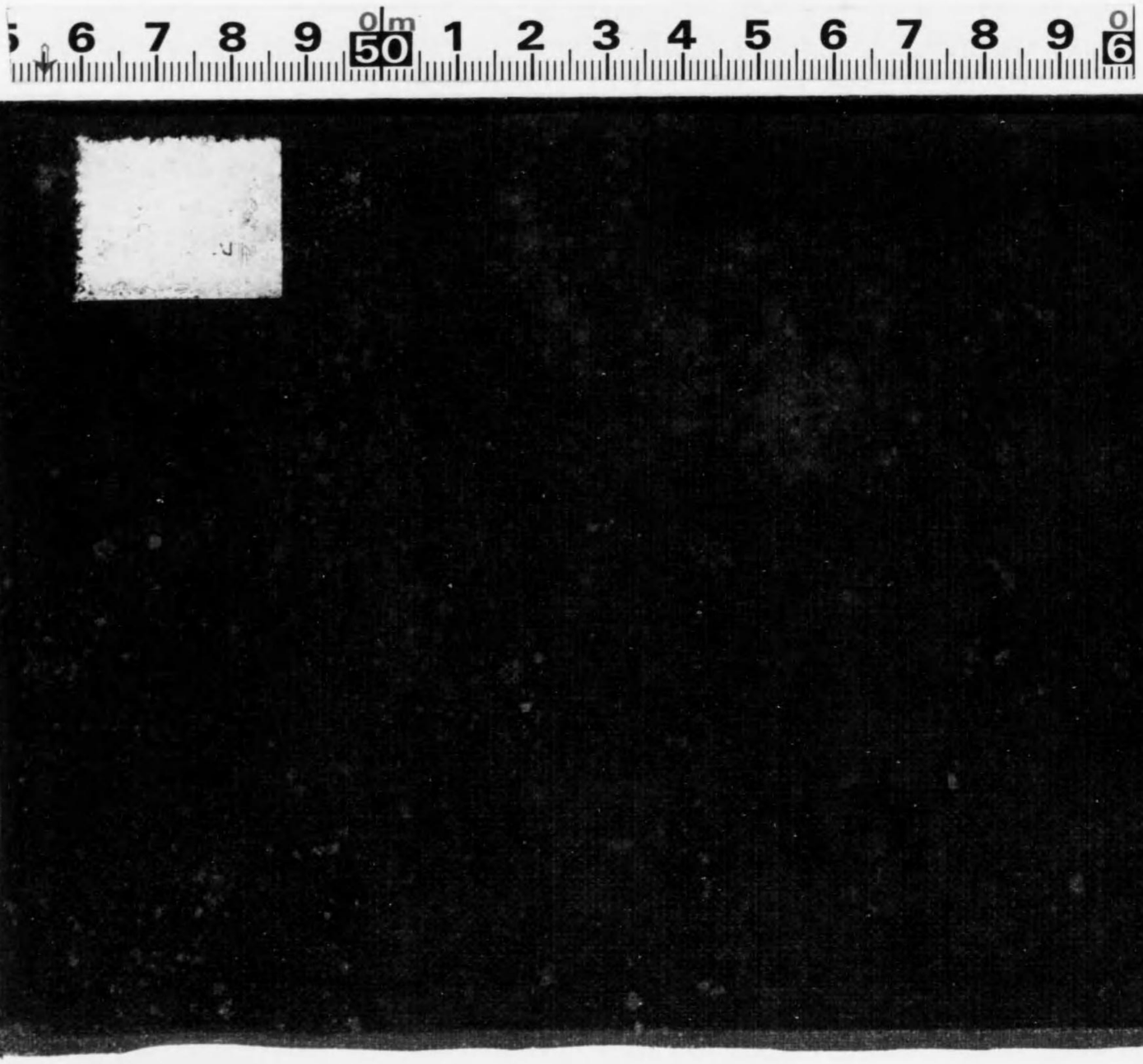

特 223
534

慈悲深き救ひの父母

昭和六・九・二五
帝國圖書館

慈悲深き救ひの父母　緒言

御同朋某が老衲に望みありと申され何事なるやをお尋すれば朝夕御内佛に於て御禮を申上る正信偈和讃を拜讀し乍らも、御製作下された思召も知らずいつも口癖の様に彌陀成佛のこのかたはと聲張上ますのみにて過しましたる長の年月、振返りてみますとあゝ惜きことをした能く思召を伺つて置けば有難さも尊さも身に泌みて覺へられるので有たにと後悔する次第、私のみではない多くは口癖に讀み過すのであらふと思はれます故御和讃に就ていかなものにも解る様にお書き與へ下されまいか、それを法の友達に頒ちて共に法味を嘗め度と存じます御老體の上に御多忙なる中へ恐縮の願なれどもお聞屆あらば自分一人のみならず多數法友の喜び此上なき仕合いかゞでありませうと、此様な御希望に默止し難く筆を取て記しましたが此慈悲深き救ひの父母と題するものでありますので定規ある講釋體を脱して所謂俗談平話、假令學校に足を容れない方でも假名文字さへよめたら讀め

慈悲深き救ひの父母

椰陰　小泉了諦述

我宗祖親鸞聖人が御製作遊ばした御聖教漢文和文併せて十一部ありますが、皆是御恩報謝のための御製作なるは勿論であるが、御和讃は格別の思召がある様に伺はれます。第一に佛德を讃嘆するに便する爲め、第二に時機に順應して化せんが爲め、第三に疑心の行者をして佛智を了せしめんが爲め、第四に無智の輩をして眞宗の本義を知らしめん爲め、第五に諷誦するものをして法味を愛樂せしめん爲めであると伺はれます。

假名の御聖教に一念多念證文、尊號眞像銘文、唯信鈔文意等多くありますけれども、言葉を七五調にしてのお示しはありませぬ。今是等のお作に異りてのお作が御和讃です。和讃とは和語の讃嘆と申すことです。印度では佛德を讃嘆するに

ば直ぐに分る様に記しましたので、心ある學者は臍を押へてお笑ひになるでせうそれも一つの御愛嬌と甘受いたす心得と申す自身も笑はねばならぬ筆の走り方これを緒言とす。

八十一　椰陰道人識

（一名淨土和讃座談）

は偈頌をもてします。夫等に習はせられて佛德を讃嘆するに便なる樣七五調に言葉をお造りになりましたのである。

聖人御在世の當時を窺ひますと、平安朝時代は今樣と申す歌謠が大流行でありまして、經論釋の意を取て七五調に致したり隆盛を究めたさうです。今樣とさへいへば上下となく貴賤となく大歡迎の有樣で愛誦せられたのであると云ふ事、夫が多く法門に關係するもので有た爲め法緣を結ぶ力が少なく無かつた。其中殊に女流の人達下流の人達の間に愛誦せられ宣傳せられた。後白河法皇の御選といへる梁塵秘抄を披見するに、如何に當時隆盛で有たかを證せられます。而も七五調にて法門歌の多きことをみても和讃なるものと異ることなく、將又文字の過誤多きを見ましても、下流の人達の間に傳寫諷誦せられて盛隆なりしことを推察出來ます。梁塵秘抄には法華經文の意を讀だ今樣が多くありますが、其中極樂歌も雜りてあります。今一二を拾ひますれば

阿彌陀ホトケノ誓願ゾ

返ス〳〵モタノモシキ
ヒトタビ御名ヲ稱フレバ
佛ニナルゾトトキタマフ
彌陀ノチカヒゾタノモシキ
十惡五逆ノヒトナレド
ヒトタビ御名ヲトナフレバ
來迎引接ウタガハズ

此樣な歌が盛んに行はれて上下を益すること少なく無かつた樣です。本願の正機たる愚鈍の輩を敎へんためには至極適當のものゆへ、時機に順應して和讃を御製作遊ばしたことゝ伺はれます。大無量壽經に還來の大菩薩普賢大悲の德を讃嘆する中に、現五濁刹隨順群生と有て、大慈悲より衆生に順ひ時機に應じて方便を盡し化を施し給ふことが明瞭に說てあります。今宗祖聖人時機を鑑み和讃を造り道俗を導かれ給ふことは經意に叶ふものと云べし、妙でありませんか。

三に疑心の者をして佛智を了せしめん爲めと申すは、和讃の總序とも申すべき冠頭和讃より堅に眺めて、一首々々の和讃を貫ける御述意が皆それであります。先彌陀ノ名號トナヘッヽ、信心マコトニウルヒトハ、憶念ノ心ツネニシテ、佛恩報スルオモヒアリ。誓願不思議ヲウタカヒテ、御名ヲ稱スル往生ハ、宮殿ノウチニ五百歳、ムナシクスクトソトキタマフの二首をお讀みなさる人は首肯出來ませう。他力信心を得て居る人ならば稱へて居る念佛が佛恩報謝であるべき筈、然るに報謝の思ひなき稱名念佛とすれば是全く疑心自力の行者と申さねばならぬ。之を經には不了佛智の行者としてお誡め遊ばしてあります。されば佛智を疑ふ罪の深きを知て心を靡へし、誓願不思議をたのみ奉るべしとの思召なるは明かであります。七百餘年の古へ聖人の御在世を思ひ奉れば愈よその感じが深くなりますことで、聖人御晩年に及ばせられ彼東關の境を出でゝ御同朋のお念佛の聲に送られ御歸洛遊ばさるゝ頃は元祖法然上人は既に御往生の後、久しく淨土の法門は隆盛にして山間僻陬に至るまで念佛の聲は響ては居れども悲い哉念佛の義が區々に成

て、同じ元祖の御化導を受た人々が互ひに異義を申立居た事が我聖人のお目まぐるしい事で有たでせう、その證左と云ふは彼關東の御同行に對しての御消息を拜讀して御覽なされ。

淨土宗ノ義ミナカハリテオハシマシアフテ候人々モ、聖人ノ御弟子ニテ候ヘドモヤウ〳〵ニ義ヲモイヒカヘナドシテ、身モマドヒ人ヲモマドハカシアフテ候メリ、アサマシキコトニテ候ナリ、京ニモオホクマドヒアフテ候メリ、田舍ハサコソ候ラメトココロニクヽモ候ハズ、何事モ申シ盡シガタク候。又云く京ニモコヽロエズシテヤウ〳〵ニマドヒアフテ候メリ、國々ニモオホクキコエ候、法然上人ノ御弟子ノ中ニモ、ワレハユヽシキ學匠ナドヽオモヒアヒタル人々モ、コノ世ニハミナヤウ〳〵ニ法文ヲイヒカヘテ、身モマドヒ人ヲモマドハシテワヅラヒアフテ候メリ、聖教ノヲシヘヲモミヅシラヌヲノ〳〵ノヤウニオハシマス人々ハ、往生ニサハリナシトバカリイフヲキヽテ、アシサマニ御コヽロエアルコトオホク候ヒキ、今モサコソ候ハメトオボエ候。

是等を拜讀してもいかに念佛の區々に分れたるかと云ふことが知られますでないか、此に於て八十有餘の御老年の時までも御消息には「他力ニハ義ナキヲ義トスト聖人ノ仰セコトニテアリキ」とあり、又關東のお同行の遙々十餘個國を越て不審を尋ね來るに對しても「親鸞ニオキテハタヾ念佛シテ彌陀ニタスケラレマイラスベシトヨキヒトノ仰セヲ蒙リテ信ズルホカニ別ノ子細ナキナリ」と何處までも阿彌陀佛權化の法然上人の仰せを大盤石の如くたのみて居らせられた我聖人に取ては、元祖の仰せにもなき事を傳へて居るお弟子方をながめられていかにお歎き有たかと云事が眼前にちらつく樣伺はれます、今我聖人が元祖の眞意を傳へて彌陀大悲の本願の深きを普く知らせんとて思召立たせられたのは申すまでもないこと、所が念佛者の多くが無智の輩にて經釋の教理も辨へぬこと故そのものに對して見易きものとして導くが肝要なること必然の道理でありませう。

今聖人が當時流行なる今樣歌謠に類したる和讃を以て佛智の願海に歸入せしめ樣と遊ばしたお骨折、是偏へに疑心自力の行者を明信佛智の人になさん御親切で

す、序文代りになる冠頭の和讃が彌陀の名號稱へつゝとありて念佛の門に入て居る人々へのお示しであること明瞭なれば、眞門より他力の弘願門に入らせる爲め卽不了佛智の行者をして佛智の大悲を知らしめ、報恩の營みを爲さしめんとの御製作なる事を忘れてはなりませぬ。

四に無智の輩をして眞宗の本義を知らしめん爲めとは假名交りの讀み易き和讃なれば一見しては左まで深高なる尊とき御聖教とは見へませんけれども中々そんなものでない、窺ひ易き樣に假名になされたのなれど所詮の法義に至りては深又高にて一切藏經を攝盡するの概ありと申して宜し、古來和語の教行信證と稱し奉るも道理であります。

五に諷誦の者をして法味を愛樂せしめん爲めに言葉を七五調になされたので之をよめばいかなる愚鈍の者でも知らず〳〵の間にその意を味はふことが出來る、古德の意を度衆生に盡される方は多く詠歌や和讃をお作りなされてある樣ですそれを緣として無智の輩を眞如門に入らせる方便とするのです、今も宗祖聖人不可

思議の願海微妙の法門をばいかなる愚鈍の者にも諷誦し易き和讃となし給へる是全く諷誦するを縁として知らず〳〵の間に不可思議の願海に歸入せしむる大悲の善巧方便に非ずして何ぞやと申すべきである、存覺上人の破邪顯正抄に

次ニ和讃ノコト上ノ一文不知ノ輩經教ノ深理ヲモ知ラズ乃至無智ノ輩ニ心得シメンガタメニトキ〳〵念佛ニ加ヘテコレヲ誦シ用ユベキ由授ケ與ヘラルヽモノナリ、

とあるが如く誦せしめん爲めの御製作なる事疑ふべからず斯く諷誦すれば自然に法味を愛樂する事となり御本意も汲み得る事になる故存覺上人は次の文に

「法味ヲアヂハヽシメンガタメノ故ニ」と仰せられてある誠に無智の人を引入れる爲めには此上なき方便と申さねばならぬ、是は啻に時機に投じての御意趣ばかりでない遠く末代を照しての大悲のお仕事であらうと伺はれますのである。

かく思召深き祖意をお汲取に成て蓮如上人の御時代に朝夕拜讀することをお始めなされたと申すことである、夫までは六時禮讃を勤行にする定りで有たのを廢

止し正信偈と共に和讃を拜誦することに成たのであると承はりました、實悟記に記されてあるを見れば

當流朝暮ノ勤行念佛ニ和讃六首加ヘテ御申シ候事ハ近代ノ事ニテ候昔モケ樣ニハ御申アリツルコトアリゲニ候ヘドモ朝暮ニハナク候ヒツルトキコエ申候存如上人ノ御代マデハ六時禮讃ニテ候ヒツルトノコトニテ候」とあります。

正にかくの如く今日に於ては津々浦々念佛の聲と共に朝夕の勤行として和讃を讀誦して法味を愛樂することに成たのは聖人御製作の御本意に相叶ふことである

と仰がねばなりません。

彌陀ノ名號トナヘツヽ
信心マコトニウルヒトハ
憶念ノ心ツネニシテ
佛恩報ズルオモヒアリ
誓願不思議ヲウタガヒテ

御名ヲ稱スル往生ハ
宮殿ノウチニ五百歳
ムナシクスグトゾトキタマフ

初の一首は他力の信相を示して自力の信相に擇ぶの御教化にして後の一首は自力の果相を示して他力の信を勸るの御教化なりと伺はれます、如是この二首の和讃は聖人の御化導は只自力の念佛をすてゝ他力の念佛に入らしむる爲め且自力の信を捨て他力の信に入らしむる爲に御製作遊ばした和讃なることを冠頭に於てお知らせ下されたものと伺ふことであります、先初めに彌陀ノ名號トナヘツヽと標せられて自力の念佛も他力の念佛もその外相に於ては替ることはない彼も稱ふる所は南無阿彌陀佛是も稱ふる所は南無阿彌陀佛にして同じなれどもと云事を初の一句にお知らせである、大經讃に彌陀ノ淨土ヲネガヒツヽとあるに同じ格です彌陀の淨土を願ひてお念佛を申して居乍らもと云事依てこれには自力もなし他力もなし皆同じである、斯樣にその外相は同じけれども自力と他力と異なる點は稱へ

心にあるのです、この稱へ心が全く自力他力の分岐點故、次にこれを明して信心マコトニウルヒトハ憶念ノ心ツネニシテと仰せられてあります此に於て自力の信者と判然その區別を立てゝ他力の信相を示されました、この他力の信を得て居る人は佛恩を深く思ひ心に絶へず隨てお念佛申すのも御恩報謝の思ひより稱へて居ることであると他力の信相を明かにして暗に之に反するものは他力信心とは云はれないとの意をお示し遊ばしたのである、即是彌陀の名號稱へ乍ら佛恩報謝の思ひなきは念佛を回向して往生せんとする自力疑心の行者にて眞實信心を得て居るのでないと思へよとの意を暗に反顯し給ふことです。

斯樣に自力の信を以て念佛を回向せんと思ふ心の止まぬはこれ誓願不思議を疑ふ人である、攝取不捨の誓願を不思議と信じつる上は正定聚に入る事なれば自力回向の心ある筈はない、然るに佛の本意は只誓願の不思議を信ぜしめんが爲であるによりて此誓願不思議を疑ふて回向の心をもて稱ふる人の往生は佛智疑ふ罪によりて化土に生ると云事をお說き遊ばしてあることなれば、自力の心を飜へして

他力の信に歸入すべしとの意を誓願不思議ヲウタガヒテ御名ヲ稱スル往生ハ宮殿ノウチニ五百歳ムナシクスグトゾトキタマフの一首としてお示しに成たのです、されば初めの一首は他力の信相を明かにして自力の信者に改めさせ後の一首は疑心の行者の果相を示して因亦眞ならぬことを知らしめ給ふのである、詮ずる所二首共に勸信誡疑の御教化にて不思議の佛智を信ずることをお勸め下されたと同時に疑ふ人の自力念佛をお誡め下されたものと伺ふのであります。

彌陀ノ名號とは南無阿彌陀佛であることやトナヘとは口にお念佛を申すことである位は誰でも承知して居ますがッヽと云ふ假名には古來解し方が種々有て傳へますれ共今此所ではナガラと解するのが一番穩當の樣に思はれます、南無阿彌陀佛〳〵とお念佛申し乍らもと云おこゝろであります、信心とは此所は自力の信ではない他力眞實の信心なりと云證據は次にマコトニとありますので疑ふ所は更になしである、何故に他力の信心をば眞實の信心と云やと申せば本願に相應するが故に不實の信心ではない眞實の信心である、ウルヒトハと申すは眞實の信心を得

た人はと云ふ意であります此眞實信心を得た人はすなはち定聚の數に入ると有て一聲の稱名をも待たず卽得往生住不退轉の益を蒙り往生に間違なき身と定まるのである、依て誓願不思議を信じ奉りたものは一聲の稱名を口にせず攝取の利益に預つて居る故往生の爲に申す念佛は一聲も入らぬ只此廣大なる佛恩を思ふのみである、依て次に憶念ノ心ッネニシテと仰せられてある憶念とは思ひ出しては忘れられぬを憶と云ひ念頭にかゝりて忘れられぬを念と云のであります、古來憶は憶持不忘の義念は明記不忘の義と云のも何れも忘れる事の出來ぬことを申しますのである、忘れることが出來ねば隨て常に念頭に思ひ出す心の常なるを指して憶念ノ心と仰せられたのでありませう然らば何を思ひ出すかと云へば唯信抄文意に明釋あり。

憶念トイフハ信心マコトナルヒトハ本願ヲッネニオモヒイヅルコヽロノタエズッネナルナリ。

本願とは第十八願にして信じ奉りしとき往生を治定せしめ給ひたる佛恩の廣大

なる本願の不思議を思ひ出す心の絶へぬを云ふのである、ツネニシテとは常に不斷常相續常の二がありますその相違點は不斷常は法德に就て名け相續常は機相に就て名くと申して近く云へば懈怠の中よりも佛恩の深きを思ひ出して相續して行く所から相續常と云ひ、その相續するのは聞信一念の時より命終まで少しも替らぬ不斷常の法德から起るの故之を不斷常と云ふのである、してみれば不斷常とは煩惱の襲來にて懈怠多き身乍らもその中に是ではと往生を疑ふ念を起さしめざる法德が染み付金剛の信心と成たのですから一度起つた信心は永く失せる事なし之を不斷常と申すのです。

相續常とは一たび金剛の信心を得たものは懈怠多き中にも佛恩を思ひ出す心絶へず相續して行くもの今此所にツネニとあるは何れぞやと云に憶念ノ心ツネニシテとありて思ひ出す心の絶へぬことなり、併之を本に戻せば思ひ出させて下さる法德によるのであるから不斷常のお蔭である依て相續常を擧る所固より不斷常の具せざるはなしと思はねばならぬ、斯樣に誠の信心得た人は攝取不捨の利益に預

かる故に如來の本願の尊とさを思ひ出す事の絶へぬのである此聞信の時往生を定め給ひたることを思ひ出す心は卽是佛恩を報ずる思ひと成てあらはれるのです、故に次に佛恩報ズルオモヒアリと仰せられてある佛恩とは佛より蒙りたる大恩は知れた事その大恩は遠くは五劫永劫の佛恩近くは攝取不捨の利益を蒙る佛恩である末灯抄に

佛恩ノフカキコトハ懈慢邊地ニ往生シ疑城胎宮ニ往生スルダニモ彌陀ノ御チカヒノ中ニ第十九第二十ノ願ノ御アハレミニテコソ不可思議ノタノシミニアフコトニテ候ヘ佛恩ノフカキコトソノキハモナシイカニイハンヤ眞實ノ報土ヘ往生シテ大涅槃ノサトリヲヒラカンコト佛恩ヨク〳〵御案トモサフラフベシ。

と仰せられたり。

この文の前にこま〴〵聞信一念の時往生治定攝取不捨の利益に預りて正定聚の位に入ることをお述べ遊ばされてあるを見ましても化土に生るゝ要門眞門の行者でさへも廣大なる佛恩を蒙れるのに、聞信一念の時往生を定め給ひて而も眞實報

土に往生させて頂く弘願門の行者に於てをやと、信じ奉りし時正定聚の位に入れしめ給ふ佛恩の廣大なるを指示して特に仰せられたに相違なからうと思ひます。

誓願不思議ヲウタガヒテ
御名ヲ稱スル往生ハ
宮殿ノウチニ五百歳
ムナシクスクトゾトキタマフ

誓願不思議とは歎異抄に

彌陀ノ誓願不思議ニタスケラレマイラセテ往生ヲバトグルナリト信ジテ念佛申サント思ヒタツコヽロノオコルトキスナハチ攝取不捨ノ利益ニアヅケシメタマフナリ」と仰せられてありて眞實本願の大悲の至極は一聲の念佛も待たず信の一念に攝取し給ふが故に第十八願を誓願不思議との給ふのであります卽聞信一念の時往生を定め給ふ本願と云ふことである。

ウタガヒテとは大悲不思議の誓願を信ぜぬのを云ので念佛の數の多少を見給は

ぬ大悲の深きを信ぜざる心なり、此大悲の本願を疑ふこヽろは稱功を回向するの思ひとなる是を次に御名ヲ稱スル往生ハと仰せられました、自力行者の當然取るべき道理と申さねばならぬこと眞門も弘願も念佛は同じなれども其は因の時の事で因相は分ち難きも果と成たら大相違報土化土の差を生じます、眞門の念佛は命終の後化土に果と成て現はるゝのですから、次に宮殿ノウチニ五百歳とありませう、宮殿とは大經に此諸衆生生彼宮殿壽五百歳等と說き給ひてありて卽宮殿は化土の住宅で五百歳はその壽命であります。

如來會には雖生彼國於蓮華中不得出現彼等衆生處華胎中獨如園苑宮殿之想と說てある中に處するものが宮殿の想を爲すとあるよりみれば華胎中に處するとは外よりみた相なる事が知られます、依て含花とも胎宮とも云へり何れにしても陰氣極まる境界と思はれます五百歳の壽は暫く一機を擧たものでせうムナシクスグルとは報土に往生したる樣に三寶を見聞する事は不可能なり迷界の衆生を利益することも不可能なり只徒らに長日月を經る有樣願ふ所ではないのです。

眞實信心の行人の稱へます念佛に自然と佛恩報謝の思ひの具すると申すは願文に望めてみても成就文に望めてみても明かでありまして、先願文に望めて云はゞ本願既に我一人を助けんが爲めに發しまします超世の悲願でありませう歎異抄に

彌陀ノ五劫思惟ノ願ヲヨク〳〵案ズレバヒトヘニ親鸞一人ガタメナリケリサレバソコバクノ業ヲモチケル身ニテアリケルヲタスケント思召タチケル本願ノカタジケナサヨト御述懷候ヒシ」と仰せられて有て誠に彌陀の名號南無阿彌陀佛とは煩惱具足の我等を稱へ易き名號にて助けんがために五劫に思惟し永劫に修行して仕遂げ下された所の行である、云換れば永劫に修行して稱ふるばかりにて助かる樣にお仕上げ下されたのでありますから有難き仕合でありませんか、してみれば今我等凡夫がそのまゝに名號を稱ふるのみにて往生の出來る樣に成たは偏へに五劫思惟兆載永劫の御修行卽本願力の致す所であります、依て本願を聞き奉る時は只かゝる淺ましき者をかく心易き事にて助けんと思召たちける御本願のお慈悲の辱なさよと信じて佛恩の深きことを思ひつゝ稱ふる所の念佛におのづから報恩の

思ひを具する筈でありませんか、それのみならず願文には乃至十念とありて稱名の遍數に沙汰し給はず一念の者も十聲の者も苟くも本願を信じて御名を稱ふ者ならば洩らさず救ふとの大悲極りなき本願なるもの報恩の思ひの具はるは理の當然であります、生涯の間懸命に成て稱名の數を勵み回向せよとのお誓で有ても佛恩の廣大なること計られざるに更に其沙汰なく苟くも本願を信じて稱ふ者ならば必ず救ふとある大悲の願を辱なさよと只佛恩の廣大なるに感じて稱ふ念佛おのづから報恩の思ひと成てあらはるゝのである、畢竟稱名の遍數を定め給はず一聲の者も十聲の者も皆洩さず救ふべしとの御本願の思召は卽是一回本願を信じて稱へんと思ひ立ちたる者は必ず救ふとの御こゝろです、此廣大の御本願を聞信する者何うして佛恩の深きを思はずに居られませう佛恩の深きを思へばその思ひよりお念佛を申さずには居れぬでないか。

成就の文に望めてお話してみませう。經に信心歡喜乃至一念卽得往生住不退轉と說き給ひてある是をば歎異抄に聖人の御言葉あり

彌陀ノ誓願不思議ニタスケラレマイラセテ往生ヲバ遂ルナリト信ジテ念佛申サント思ヒ立ツコヽロノオコルトキスナハチ攝取不捨ノ利益ニアヅケシメタマフナリ

既に願文に於て乃至十念と誓はせ給ひて一念の者も十念の者も一回本願を信じて念佛申さんと思ひたちたるものは必ず助けんとお誓ひ遊ばされ、而して其願成就の經文に信心歡喜乃至一念卽得往生住不退轉と說かせられてあるもの信の一念の時一聲の稱名を待たずして攝取の利益に預けしめ往生に間違なき身と定め給ふのである、然れば本願を信じて往生治定の思ひに住するは是正しく攝取不捨の利益に預けしめ給ふからであります、如是本願を信じたるものなれば必ず助くべしとの本願を聞て念佛せんと思ひたちたる時攝取に預り正定聚不退の位に住し往生に間違なき身と定め給ふとあれば本願を信じたる者只嬉さの餘り、稱ふる念佛は辱けなき佛恩報謝の思ひより外になきは當然の事です、これに反して信心まことならざる者は何故報恩の思ひなきやと云ふに、一言にて盡るものであらう其は佛

智を了せざるが故にと云ふべきである。

彌陀成佛ノコノカタハ
イマニ十劫ヲヘタマヘリ
法身ノ光輪キハモナク
世ノ盲冥ヲテラスナリ

この和讃は最も口に馴れ耳に馴れお馴染深き第一等でありませう然れども文句の上に馴れたのみでその思召が分らぬとすれば流行歌同樣になりますからいかなるお方にもお分りになる樣お話致しませう、學者識者は眼耳を蔽ふて頂きませんと初門の人達に十分お話をする事が出來ませんから宜しく御諒察下さいませ、さて彌陀成佛ノコノカタハと讀み出せばイマニ十劫ヲヘタマヘリと誰も彼も助音すること六ヶ敷くはないが案外にも眞宗門下に育つお同行に開口一番の名聲彌陀を知らぬ者が多くないでせうか、かく申すと其樣な事云のが案外だ苟くも眞宗を名乘るものに彌陀を知らぬ者が何處にある他宗の人と雖も指を佛敎に染るものにし

て彌陀を知らぬ者はない、假令佛敎以外の宗旨でも今日彌陀を知らぬと云ものは恐くあるまいと思ふと。

成程彌陀は眞宗の本尊にして寺院の須彌壇上宮殿中に安置せられ在家の佛檀にも同樣安置せられてあるから知らぬ筈はない、如是の御姿を見て居るのを以て彌陀を知るとは申さぬのである、何故なれば其は只形の上に立撮卽行の彌陀とか上品上生の彌陀とかを知るのみです、眞に彌陀を知ると云ふは彌陀の佛智を領得して彌陀の願意に叶ふた信者ならねば知たとは許さぬのであります、此所に兒童を抱た婦人ありと假定なされ、それに對してお前さん父母を知て居るかと尋ねた時尋ぬる人の心を知らぬ時は誰も不審千萬に聞くであらう、何故に四十にも手の屆く婦人の子供の三人も產みしもの親を知らぬ筈なきに對して問ふので有たらう、婦人は忽ち彼老爺と老媼が父母なりと答ふるならんもそれでは眞の答にはなりませぬのである、と云ものは其婦人兩親の恩を知らず子道を履まず不孝にして居るから親知らずだなーと思ふ心より口を開きましたのである、一人娘にて父母は蝶

よ花よと愛育し成長の上結婚し子供の三人もある身が明ても暮ても兩親を泣かせてばかり居るのです親を知て居るのかと云はずに置けませぬ、ハイ知て居ますと白髮頭や弓張腰を指示したのでは承知が出來ませぬでせう三十年四十年の兩親に順ふことなく不孝にする位の話ぢやない、十劫以來呼びづめ招きづめの大悲の彌陀に今日まで順はず背き通しの身がお姿を見て知て居るとは申し難ひ次第であるまいか、皆さんお氣が付たら速に改悔懺悔して眞の如來の子として頂きませう。

彌陀成佛以下の三首は序の如く法身般若解脫の三德をお知らせ下された和讃でありますが而して初の一首は次に表はるゝ、無量光無邊光無碍光無對光炎王光淸淨光歡喜光智慧光不斷光難思光無稱光超日月光の十二光を生み出す所の母と云ふべき根本です、乃で此一首は最も力を籠めてお話をせねばならぬ所又お聞き下さる方々も油斷のない樣に御注意下さいませ、乃で十二の光明は空間的に十方を照す横德にして今此彌陀成佛ノコノカタハイマニ十劫ヲヘタマヘリの二句は壽命に約して時間的に三世を貫く堅德であります、かく定りましたら彌陀成佛ノコノカタ

ハイマニ十劫ヲヘタマヘリの二句は壽命の體德なる故此後一劫を經てお尋したら今に十一劫を經たりと仰せらるゝに究つて居る、ですから五劫を經た後には十五劫を經たまへりとあり千劫萬劫億劫無量劫盡ることなき無量壽佛なりと仰せられますであらう。

法身ノ光輪キハモナク世ノ盲冥ヲテラスナリとは卽是光明に約して空間的に十方を遍く照し給ふ阿彌陀佛の橫德をあらはして下されたのである、法藏因位の昔より拔目なきお慈悲は我等を救はんとて無上の大願を發し無上の大行を御成就あらせられ無上の淨土を構へ待つて〳〵待わび給ふことが十劫であるぞよとのお知らせ、なんと聞流しに知らぬ顏が出來ませうか南無阿彌陀佛〳〵今一つ云換れば橫に十方竪に三世、空間的にも時間的にも隅から隅まで貫通して光明名號の父母が信心の子を育て上げて下さると云ふ仕合。

法身と申すことは佛には法報應化の四種あるとか法性法身方便法身の二種あるとか事佛と理佛の差あるとか論じかければ、問云答云で云くの往復を重ねた上な

らねば臍落し難い事であれど、そんな面倒な事は拔きにして一切諸佛の智惠も功德も皆悉く集めての持主の阿彌陀佛なる故、諸の功德の法の身なりと云ことを一口に縮めて法身と仰せられたと信じませう、斯樣にお德を收め給へる阿彌陀佛が無明長夜の闇を照し破り信心の智惠に入てこそ佛恩報ずる身となるまで、仕立上て下さることを世ノ盲冥ヲテラスナリと仰せられたのであります。

光明を光輪と仰せられたのは輪は摧破の義と申しまして恰度轉輪王が四天下御通行の時に輪寶が前驅を爲しいかなる山岳もいかなる河海も砥石の如く平々坦々となるそれに齊しく我等煩惱の高峯山岳も生死大海も平々坦々となし給ひ、西方彌陀の淨土に往生成佛の差支なき樣にして下さる光明のお用きを顯はす爲に光明の字を更へて光輪キハモナク世ノ盲冥ヲテラスナリと仰せられたのであります。

智慧ノ光明ハカリナシ
有量ノ諸相コトゴ〳〵ク
光曉カフラヌモノハナシ

眞實明ニ歸命セヨ

前にお話申しました通り彌陀成佛以下の三首は法身般若解脱の三德を擧給ひたので既に初の一首はお話了りましたから第二の般若の德をお知らせ下された一首に移ります、般若は梵語にして漢譯に智慧と申します智惠ノ光明ハカリナシの一句は申す迄もない如來のお德にして、有量ノ諸相コトゴトクの一句は誰が聞ても我等凡夫の總てを指したお言葉と云事合點出來ませう、云換れば有量の諸相は無明煩惱の大病人にて智惠の光明は萬病退治の大妙藥なり、照す光明の量りなしと云無量に對して照される我等凡夫の方を有量の諸相と仰せられたのである、照し給ふ智惠の光明の太陽は隔意ないのなれども自力定散の蠟燭位を誇りて四圍の戸障子を晝夜閉塞して置く樣では青天白日の德を知ることは出來ませぬ。

然るに光曉カフラヌモノハナシと宿善開發の時至り無明長夜の闇はれてかゝるものを助け給ふは佛智の不思議なればこそと、後生の一大事に安心安堵の出來るのは有量の諸相中他力有緣の身の仕合にありと御恩の程が骨髓に徹底し、報恩の

稱名念佛怠りてはならぬぞと心付く迄が全く我等凡夫の智惠ではない、法身の光輪きはもなく世の盲冥を照し給ふお蔭であると喜ばねばなりません、蓮如上人は

有難ノ彌陀ノ光明ヤコノ光明ノ緣ニアヒタテマツラズバ無始ヨリコノカタノ無明業障ノオソロシキ病ノナヲルトイフコトサラニモテアルベカラズ然ルニコノ光明ノ緣ニモヨホサレテ宿善ノ機アリテ他力ノ信心トイフコトヲ今スデニエタリコレシカシナガラ彌陀如來ノ御方ヨリサヅケマシ〳〵タル信心トハヤガテアラハニシラレタリ」と仰せられたは此由れでありませうと思ひます。

さて此所に光明と云はず光曉と仰せられたは何ぞ譯のあることかと云ふに曉は夜明けのことで闇の明るくなりそめである、我々が無明長夜の闇の晴れ初めが眞實明に歸命したる一念なる故その邊を現はして曉の字になされたる御高意であらうと伺ふも敢て過失はなからうと思ふ、眞實明ニ歸命セヨとある此眞實明は阿彌陀如來に尊號を三十七擧たる中の隨一なり次の平等覺も難思議も畢竟依も皆此例である、御據は方等大集經に破二無明闇一爲二諸衆生一作二智惠明一の文なり凡夫には

智惠明なし、彌陀の光明より衆生の無明を破し眞實信心の智慧明を得せしめ給ふ故に眞實明と名け給ふのである、歸命セヨの御一言は耳を傾けて敬聽せねばならぬことで歸命とは梵語に戻せば南無である、本偈では身業禮拜が主もに成てあれども宗祖聖人の思召は身業禮拜も丁稚が店主に頭下る如き無意味のものではない廣大深重の佛恩を思ひて禮拜せよ禮拜するには所拜の彌陀をたのめよと一念歸命の根元に付て信心をお勸め下さるのである、是で三德の內の般若のお德十二光の內の第一無量光を御讃嘆申上終りましたなんと有難きお光明のお德でありませんか。

解脫ノ光輪キハモナシ
光觸カフルモノハミナ
有無ヲハナルトノベタマフ
平等覺ニ歸命セヨ

法身般若解脫の三德を上來の二首にて二德をお話致し了りましたから今は第三

解脫のお德を述べませう、法身般若解脫の三德は鼎の三足の如く相離すこと出來ないものにて我皇國三種の神器に比してよからうと思ひます、三種の神器と申すは八咫の鏡、八坂瓊曲玉、天叢雲の寶劍なり、且らく法身を鏡に般若を玉に解脫を劍に比況して敢て差支なからうと思ひます、天親菩薩が倶舍論に大聖釋尊の御德を御讃嘆なさるゝに就て智斷恩の三德を擧てある中の斷德にあたるが今の解脫です、御文面の上では有無ヲハナルトノベタマフと僅に煩惱の繫縛がほどけた事なれども思召の底を伺へばその位に止まるのではない、其悟りの自體が自由自在であると云事を十分含蓄してあるのです、解脫は梵語にて涅槃と云ことにて支那譯に滅度と云大乘義章十八二十六言二解脫一者自體無レ累名爲二解脫一とあり、此中涅槃の自體は本來淸淨にして諸の煩惱を離れた心を解脫と名くると云ふが初の義にして、果上へ至ては業煩惱の繫縛をはなれたるを解脫と名くると云ふが後の義であります、今一層進んで解脫のお德を述れば愈よ我等が尊信し奉る眞宗の御本尊は有難くもあり尊とくもある事が明了になります、何故なればいか程三塗へ往來し

て受苦の衆生を濟度するとも更に自利の德を損する事なくして、利他の德を與ふることが出來るのである故に單に光明と云はずに解脱の光輪と仰せられたのである、輪は前に申した如く摧破の義ありて衆生の煩惱業障を殘る所なく摧き破るお德のある光明なる事を光輪と名け給ひたのである、和讃の御左訓にゲダチトイフハサトリヲヒラキホトケニナルヲイフソレラガアクゴウボンナフヲアミダノオンヒカリニテクダクトイフコヽロナリ」と遊ばしたは此由れなり、斯樣に自他平等の御利益を持たせられる平等覺を歸命せよとのお勸め之を信せずに居られませうか、キハモナシの一語にて無邊光の德なることも亦顯はるゝ御所明巧みなる實に御讃嘆申上べきであります。

光觸カフルモノハミナ有無ヲハナルトノベタマフとあるのを反對に句を造りてみる時は、光觸かふらぬ者はみな有無をはなるゝことはなしとなりませう、されば今まで有無の二見の仲間で有た我々が聞信一念の時攝取の光明に觸れる身は立所に六趣四生の因亡し果滅すと云ふ無上の法德に支配せられ、九十一百に成ても

此孫が嫁を迎へて彦の顏を見るまでは死にたくないと云ふ執著が、いつとなく長居すべき娑婆でないと氣の付たが取も直さず有の見を離れた有樣、ねてもさめても念佛して居る只今が六字の汽車の進行中追付淨土の都へ安著なりと樂む所の信德にはいか程探してみても無の見の色はない、此觸の字のふるゝと云ふに就て今一つお話をして置くことがある花を見たを目にふるゝと云ふ鐘を聽たを耳に觸るゝと云ふ物の當つたを身に觸るゝと云ふ、是等は能く分るが今光りに觸るゝと云ふは目や耳や身に觸れた類とすれば更に分らぬことになる是は滴々と雫のたる洗濯衣を乾物竿に掛て置く時いつとなく濕氣は蒸發して仕舞乾き切た衣服になるを太陽に觸れたと申します、阿彌陀佛の光明に觸れたと云ふがその道理で我々の樣な疑惑の滴りも聞法の竿に掛て日を送る內にいつとなく此身は必定墮獄の機なれども、かゝる者をお救ひ下されるが如來の御誓願ぞと疑ひなく深く信じて往生一定御助治定と乾き切たものになるのを光りに觸るゝと仰せられましたのである。

有無の二見と云ふ事を開てみる時は六十二見と成て唯識では分別起俱生起と立

てゝ面倒なものである、世間に云ふ人間は幾度死んでも人間に生れて來るものと思ふは有の見にて、又死ねばそれきり火の消た様なもの後には何もないと思ふは無の見なりと云ふばかりぢやない、迅雷風烈を恐怖する迄が俱生の身見と云ふ有の見の一部分である、大掃除も檢査すみたりと落付た心の内に無の見があると云ふ次第です、してみると我々が一生涯善にせよ惡にせよ有無の二見を離るゝ事は出來ないのであります、然るに光觸カフルモノハミナ有無ヲハナルトノベタマフと他力回向の信德には二乘非所識の妙あれば、速に善惡隔てなく照し給ふ平等覺と尊稱ある彌陀をたのめとの思召で平等覺に歸命せよと仰せられたのであります ぞや。

光雲無碍如虛空
一切ノ有碍ニサハリナシ
光澤カフラヌモノゾナキ
難思議ヲ歸命セヨ

此一首は十二光の中の第三無碍光のお德を讃嘆遊ばすので光雲といひ如虛空といふ又光澤と云ふ皆是譬喩なる事は申す迄もないが、光明を雲に喩へ給ふ源は佛說にて一言一句苟くもせざるお言葉遺ひが宗祖聖人にてましますと仰がるゝ事です、光明を雲に喩へ給ふは華嚴經に基き虛空をもて無碍の妙用を顯はすは涅槃經に據を取給ふと云次第、一首の和讃に一代經を攝め盡してあると申しても宜しき譯である、假名の御和讃などゝ輕々しく看過してはなりませぬ無始以來の初事に無明長夜の闇晴て卽得往生の夜明となりし德を無量光の下で光曉と仰せられ、觸其身者心意柔軟歡喜踊躍善心生焉と一たび無邊の光明に接觸すれば邪見も正見に强情も柔軟になる德を無邊光の下で光觸と遊ばされ、今は第一句に光雲として長く佛種の盡た無有出離之緣の機をお救ひ下さる厚き法德を顯はし給ひ第三句に光澤として枯渴の凡惑も滋き甘露の法雨に遇ひ信心の芽を生ずる仕合を蒙ることをお知らせ下されたのである。

華嚴探玄記に雲に普遍の義潤澤の義法雨の義と種々並擧してある今和讃に光雲

とあるは普遍の義よりお取なされたのであらふと思はれます、何故ならば無碍如虚空の五文字からみても明かで虚空は一切に碍ることなく行渡らぬ所なき物である事に疑ふ者はない、大悲の光明人法何れに向ふても碍りなし第二の句に一切ノ有碍ニサハリナシと仰せられたはこの由れである、かく障碍なき光徳が枯渇の凡惑を隔てなく照して下さるゝによりて光澤蒙らぬものなきに至る所より澤の字を味へば華厳探玄記の潤澤の義をお取なされたと云ふも明かになります。

往生論註下に此光明照二十方世界一無レ有二障碍一能除二十方衆生無明黒闇一とあり唯信抄文意に無碍ハ有情ノ悪業煩悩ニサヘラレヌトナリ」と仰せられ、尊號眞像銘文に無碍トイフハサハルコトナシトナリ衆生ノ煩悩悪業ニサヘラレザルナリと仰せられ、御消息集に無碍光佛ハヨロヅノモノヽアサマシキワルキコトニハサハリナクタスケタマハン料ニ無碍光佛トマフストシラセタマフベク候」と仰せられてあります。

難思議ヲ歸命セヨとは前の如く難思議は三十七名中の尊號にして云ひ換れば彌

陀をたのめよの御勸告であります、いかにも難思議の阿彌陀佛であるまいか無有出離之縁と佛種の盡果て仕舞た枯渇の凡惑が、枯木に芽を萠した位ぢやない百年の枯古樹に一朝の白雨で一時に葉を生じ花が咲き實を結ぶと云ふ不思議、能被の法徳が所被の機に蒙るや疑心自力の枯色萎態は影も殘さず信心歡喜乃至一念卽得往生住不退轉と花も葉も實も一時にみられると云ふ仕合、十方無量の諸佛は威神功徳の不可思議なることを讃嘆し給ひ證誠し給ひ、且勸勵し給ふ筈である難思議を歸命せずに居られぬは我々である、御左訓にヒカリクモノゴトクニシテサハリナキコトコクノゴトシ」と遊ばされてあるは有難き思召なり。

清淨光明ナラビナシ
遇斯光ノユヘナレバ
一切ノ業繫モノゾコリヌ
畢竟依ヲ歸命セヨ

この一首は十二光中第四の無對光を讃嘆し給ふと云ふ事はナラビナシの一語に

分明なりと申してよからう、然るに爰に一寸不審の起らんとするは清淨光明の文字である是は十二光中の第六清淨光に紛れ易き樣に思はる是には何ぞ思召のある事なるやと云ふに、元來十二光と云ふは互ひに相離れざるもの故何れの德名が何れの光明に加はりましても差支はないのです、既に無量光の和讃に智惠の光明とお書きに成てあるのでも判り易きことでありませんか併只今は御相承有ての事なればその證を擧ませう、曇鸞大師が往生論註に安樂淨土はこれ無生忍の菩薩淨業の所起阿彌陀如來法王の所領なりと淨土論の淨土妙色功德を註釋なされてあるより伺へば、無垢光炎熾明淨曜世間と云ふ阿彌陀佛の光明は比すべきものがない其筈無漏清淨願心より發起して成就遊ばしたる清淨光明故、諸佛淨土に比對して見るものなしと無對光のお德を讃嘆なされるのに清淨光明並びなしと清淨光明の字を擧給ふのである、由是觀之別して確かなる證據有てのお言葉使ひと申さねばなりませんことであります。

綺麗にして清淨なるお光明は何の爲なるやと伺へば御草稿の御左訓にトムヨクノツミヲケサンレウニシヤウ〳〵クソウミヤウトイフナリ、と仰せられてあります、いかにも貪慾はきたなきものであるから世間でも彼人はきたないと云ふに顏は業平小町の再來とも云ふべきがある是全く貪慾の深き所を呼ぶのである、他人は勿論親戚も愛想をつかす汚穢心よく考ふれば自身亦自心にあきれる程の汚穢心を如來は光明をもて照破し、終に清淨の信心の花を開かせて下さるお手柄を表はして清淨光明と名け給ひたのである。

光明々々と聞く時は阿彌陀佛の外に別に探す思ひがあるも知れぬけれども光明卽是阿彌陀佛なり夫ぢやによりて遇斯光の御左訓には、ミダブチニマフアヒヌルユヘニとお記し遊ばされてある斯光に遇ふのが彌陀佛に遇ふのなり彌陀佛に遇ふのが聞其名號と六字を聞く事なり、六字を聞くと云ふは南無とたのめば阿彌陀佛の助け給ふとある六字の謂れを聞く事なり聞く時信心歡喜と疑ひはれ往生一定御助治定と未來の大事に安堵するのである故に、信卷には衆生佛願の生起本末を聞て疑心あることなしこれを聞と云ふと仰せられ、蓮如上人は聞くといふは只大樣

にきくにあらず善知識にあひて南無阿彌陀佛の六字の由れをきゝひらきとお述べなされました。

斯様に聞く一念の時卽遇斯光の時無始以來造り擴げし惡業煩惱の綱を殘る所なく截斷し無碍自在の悟境に遊ばして下さる故に遇斯光ノユヘナレバ一切ノ業繫モノゾコリヌと仰せられたのであります。無對光佛は何處までも無對光佛にして諸佛に並びのないお手柄ましますので我々の如き罪業深重の凡夫で有乍ら自惚根性强く僅かの善に目をかけて惡を除て譽られ樣などゝ計らふた橫著者も、聲聞緣覺菩薩の諸佛淨土にまします御歷々も萬川の一海に歸入する如く十方諸有の衆生歸すべき所は彌陀願海の外なければ早く其歸すべき所に歸せよと、畢竟法身の阿彌陀佛を指定し給ひて畢竟依ヲ歸命セヨと我々に安心を勸歸し給ふ思召有難き事でありませんか、畢竟法身の事は御草稿の御左訓にホフシンノサトリノコルトコロナクキハマリタマヒタリトイフコヽロナリと遊ばされてありて明了です。

佛光照曜最第一

光炎王佛トナヅケタリ

三塗ノ黑闇ヒラクナリ

大應供ヲ歸命セヨ

前の無對光と同樣に並びなき光明なる事は最第一の三字にあらはれて明白である、いかなるお德をもて最第一と讚嘆し給ふやといふに大無量壽經には諸佛光明所不能及とお說き遊ばしてある、蓮如上人はされば無始以來つくりとつくる惡業煩惱を殘る所もなく願力不思議をもて消滅する由れあるが故にとお述べなされた如く、此佛光に照されぬれば三惡道に沈むべき業因を截斷し燒亡して下さるから炎の字が付き諸佛の光明の及ばざる所の最第一、諸佛中の王光明中の極尊なる故光炎王佛と王の字が付く道理であります、諸佛中の王光明中の極尊なりと云は異譯の大阿彌陀經又平等覺經にある金言で皆是光炎王を御讚嘆なされたのであります、斯樣に因位の菩薩に對して無對光と名け諸佛の光明に對して光炎王と名くる阿彌陀法王の光明なる故、三塗ノ黑闇ヒラクナリと諸佛超越のお德を表はして下

されたのである、拙衲曾て自身獨坐の粗像を畫き尻尾を附して其上に袈裟カケテ念佛スレドモ古狐名利ノ尻尾隱サレモセズと書添へた事がある實に恥かしきは自己心中、若し他力回向の信心決定せずんば袈裟掛乍ら珠數持乍ら無間の炎の眞中に居るべきもの恐ろしきことであります。

今は善知識の厚き御教示によりて身分忘れて計らひ立した自力定散に邉乞し愛育を受た父母の心も生み育てた我兒の心も自身の出所行所過去も未來も知る事叶はぬ眞黑闇の心中に、信心の智惠をもて未だ見もせぬ知りもせぬお淨土を見て來たよりも慥に思ひ家業家職を勵みつゝ國家にも盡し祖先にも盡し心配なく日夜を送らるゝ事は、近く二諦相依の御宗風をお開き下された宗祖聖人の御恩に相違ないが其源は佛光照曜最第一なる光炎王佛の御大恩なる事を忘れてなりませぬ。

大應供ヲ歸命セヨとは是亦彌陀の德號三十七の中の隨一にして諸佛同等の德に非ず法施を爲し財施を爲すべき諸佛應供の中別して最勝無上なるもの故、眞に十方衆生に供養を受くべき大應供なりと阿彌陀佛を指定して我々安心の歸すべき所

をお示し下されたのであります、大應供の御左訓にミダニヨライナリと遊ばしてある又御草稿の御左訓に一層委くなされて有て一切衆生ノ供養ヲウケマシマスニコタエタマフニヨリテ大應供トイフナリと遊ばしてある。

道光明朗超絶セリ
清淨光佛トマフスナリ
ヒトタビ光照カフルモノ
業垢ヲノゾキ解脫ヲウ

是より以下の三首は序の如く淸淨歡喜智惠の三光にしていつも連續し分離せざる關係があるのです、何故なれば淸淨光は貪慾を退治し歡喜光は瞋恚を退治し智慧光は愚痴を退治するお手柄有て三毒が離れぬ煩惱なるによりて退治し給ふ方の三光も亦離れずに利益を施して下さるのです、貪瞋痴の煩惱は三毒の名の付く丈ありて恐ろしき地獄餓鬼畜生の三惡道はこの三毒より生ずるのである、淸淨光と云ふきよらかな光明をもて我々が日夜造りつゝある鼻もちならぬ穢惡汚染を洗濯

して下さるお徳があるから、そのお手柄をあらはし業垢ヲノゾキ解脱ヲウと仰せられたのであるのです三毒を退治するに歡喜智恵の二光にては利益なしと云ふ事ではない、初に申せし如く三光は離れざる關係ある故何れにも及ぶ事なれども貪慾に清淨光をお擧遊ばす所以は血を洗ひ墨を洗ふには清水をもてせざれば詮なきが如く、無始以來の汚染を洗ふには清淨光を以て照したまうと云ふが眞に適當なことであるを以てなり。

さて大體はお解りになりましたでせうが振返りて御文面をお話することに致しますからそのお積りにてお聽き下さいませ、道光明朗超絶セリとある道の字は悟りの智恵を指して道と申すのぢやと一口に申しても疑ふ所なきが通佛法の規則なれども、今は道光とは阿彌陀佛のお智恵より放ち給ふお光明を申すのであります左樣に伺ふことは遠く探し求むるに及ばぬ近き御左訓にミダノヒカリアキラカニスグレタリトナリとあるので明鏡を取て面像をみる如しと申してよからう、阿彌陀佛のお光明は煩惱の闇を照破し給ふ事諸佛淨土に並びなく超絶してましますを

以てアキラカニスグレタリと御左訓をお添へに成たのでありませう、菩提こゝに翻じて道と名く果德圓通是を道と名くとありて菩提を道と申すのである何故に道と申すなれば大道の往來自在なるが如く佛の圓通無碍なる事を顯彰するのであります、乃で道光は彌陀の智光と知ると同時に道光は體なり明朗は相なり超絶は用なりと云ふことを知らせて貰はれます、斯樣なお德の勝れた清淨光佛に照されぬれば、三世十方の諸佛のお手に合はなかつた煩惱具足の凡夫が、丈夫なる御本願ぞと長き間の自力と手を切て助け給ふ親の手にすがり奉る一念發起となるのである、夫故次の二句にヒトタビ光照カフルモノ業垢ヲノゾキ解脱ヲウと仰せられたのである、御草稿の御左訓にアクゴウボンナフヲモノゾキゲダチヲモウゲダチトイフハブチクワニイタリホトケニナルヲイフと仰せられたり。

ヒトタビ光照カフルモノとある所に有難き一念業成の御流義が顯はれてある事を喜ばねばならぬと云ふものは歎異抄に、

彌陀ノ誓願不思議ニタスケラレマイラセテ往生ヲバトグルナリト信ジテ念佛申

サントオモヒタツ心ノオコルトキスナハチ攝取不捨ノ利益ニアヅケシメタマフナリ

と仰せられてありませう此御文の上でも信心定まる時往生亦定まる一念業成の事は明了で有て只今ヒトタビ光照カフルモノとある一句をそれと同様に頂かるゝ理由を述れば、一度かふるとは本偈の一蒙光照の其儘でこれを源の大無量壽經に伺へば遇斯光者三垢消滅と說き給ひて、蒙は遇に成てある遇の字は宗祖聖人のお釋に遇ハマウアフトイフマウアフトイフハ本願ヲ信ズルコトナリ」と仰せられてある。然ればヒトタビ光照カフルモノとは聞其名號信心歡喜乃至一念の者と云ふ譯になりますから業垢ヲノゾキ解脫ヲウとは現生に正定聚の位を得て未來必ず滅度の利益を得る事をお知らせ下されたのである、此一句の中業垢ヲノゾキとあるが現益の方で解脫ヲウとあるが當益の方と伺はれます、けれども其様に角目正しく云はずお蔭によりて迷ひを離れ悟りを開かせ頂く事の嬉やと讃嘆致しませう。

慈光ハルカニカフラシメ

ヒカリノイタルトコロニハ
法喜ヲウトゾノベタマフ
大安慰ヲ歸セヨ

三毒退治の光德中にて此一首は瞋恚の煩惱を退治して下さるゝ歡喜光のお德を讃嘆遊ばしたのであります、本偈には慈光遐被施二安樂一故佛又號二歡喜光一、光所レ至處得二法喜一、稽二首頂一禮大安慰一、とありて慈光の二字最も力あり且尊ときもの此一首の骨である、さて清淨歡喜智惠の三光に就て次前道光明朗には清淨光佛と顯はし、次後の無明の闇には智惠光佛とあらはしてあれば今も歡喜光佛とあるべきにその事なきは何故ぞと論ずる人ないとも云へぬ、けれども根本の大經を伺へば明了に歡喜光佛とお說き遊ばしてあるのみならず其お德をあらはして三垢消滅身意柔軟歡喜踊躍とお說きに成てある、固より經說の上では十二光に通じてのお德なれども別して歡喜光の德を顯はし給ふのであるとみて、差支なからうと云ふは讃阿彌陀偈に依て明了なる故。

斯様に經釋の上に於て歡喜光のお徳を承知し而して今の一首を讀む時は徹頭徹尾歡喜の至らぬ所はありません、慈光の慈は誰がみましても慈悲の慈に相違ないでせう慈悲は拔苦與樂にて爲物大悲の光明我等をして能く慈心歡喜せしめ給ふが故に慈光とあるのです、次ハルカニカフラシメとは横に廣く云へば十方に渡り堅に長く云へば三世を貫き利益を蒙らしむるお光明なる故に、慈光ハルカニカフラシメと仰せられたのである、ヒカリノイタルトコロニハ法喜ヲウトゾノベタマフとあるは、清淨光佛の下のヒトタビ光照カフルモノとあるに同く聞其名號信心歡喜の妙味を顯はして、往生成佛に間違なしと安心の出來ると同時に嬉しや有難やと云法喜を得さしめ下さる事が明かであります、信心歡喜と喜ぶこゝろは我等自發の喜びにあらず所聞所信の名號法から得るのである故法喜と仰せらるゝは當然でありませう。

憬興と申す高僧が作られた述文讃には歡喜光を釋して從無瞋善根而生故能除衆生瞋恚盛心故とあり、我宗祖聖人は御草稿和讃に御左訓を施し給ひてクソンギクソウブチヲホフキトイフコレハトンヨクシンイグチノヤミヲケサンレウナリと仰せられました、此思召は法喜の二字を歡喜光佛の事となされて我等に安慰を與へ給ふ法徳となし給ひてあるのです、然れども今は法喜の二字を我等の信心歡喜となし給ひたのであります、斯様なお徳を耳に聞くとも心に信ぜざる者に利益を得らるゝ筈はない、蓮如上人が信ヲエタラバ同行ニアラク物申スマジキナリ觸光柔軟ノ願アリ心ヤワラグベキナリ、信ナケレバ我ニナリテ言モアラク爭ヒモ出來スルモノナリ」と仰せられしを思ひ合すべき事と思ひます。

大安慰ヲ歸命セヨとある大安慰は申す迄もない三十七德號の隨一にて阿彌陀佛の事である、舊華嚴第四名號品に或稱安慰と說てあります、是は諸佛に通じて安慰とあるのなれども今は大の一字を附して阿彌陀佛とし給ふのである、大經には一切恐懼爲作大安と說てありていかにも我等凡夫の貪慾の荒波瞋恚の熾炎左右に汚すばかりでない、四大五蘊等の群賊惡獸追隨逼迫する中を恐怖の念なく樂國に向ふ所の力になる大安慰者と云ものは全く阿彌陀佛にして諸佛にはありませぬ

善導大師の二河譬に汝一心正念ニシテ直ニ來レ我能ク汝ヲ護ラム衆テ水火ノ難ニ墮センコトヲ恐レザレ」とある招喚の聲大安慰と云はずして何と申しませう、御左訓にダイアンキハミダノミナナリ一サイシユジヤウノヨロヅノナゲキウレイワルキコトヲミナウシナフテヤスクヤスカラシムと仰せられてあり、歸命せよ／＼大安慰を歸命せよ歸命せずには居れませぬ慈光遙に蒙らしむる歡喜光も光りの至る所の淺ましき我等も、佛心を貰ひ受け法喜を得たる信心歡喜もその根源を尋れば皆是歡喜光にて照破し給ふ大安慰たる阿彌陀佛のお用きである。

無明ノ闇ヲ破スルユヘ
智惠光佛トナヅケタリ
一切諸佛三乘衆
トモニ嘆譽シタマヘリ
清淨歡喜智惠の三光をもて貪瞋痴の三毒を退治して下さると申した中貪瞋の二を照破し給ふ所の清淨歡喜の二首はお話がすみまして、只今は第三の智惠光にし

て我等が無明の黑闇を照破して下されるお德を讃嘆し給ふ一首である、此一首を前首に對すれば悲智の二門と成てあり道光明朗以下を連續すれば三毒退治の三光と成てあります、何れにしても一筋繩にかゝらぬ我等凡夫を逃してならぬと云親心より數々のお手數をかける譯である。

學者の口に云はせる時は初の二句は光明の德相を擧げ後の二句は諸佛の讃嘆を擧ぐと申す所なれども、先此一首の親心否親玉は智惠の光明と云へる大醫にして療治を受ねばならぬ大病人は無明沈溺の我等凡夫なりと云ふ事を忘れてはなりませぬ、さて無明と云字は文字當相そのまゝが闇黑と云事に疑ひなしである、起信論には根本無明枝末無明の釋が出てあり天台には見思塵沙無明の釋あり倶舍唯識には迷事迷理、夫は／＼語る者からして判らぬのが多い故聽く人には判る筈がないで今は其樣な理屈云はぬ事にして無明は一切迷ひの根本と承知するが宜し、その一切迷の根本は何ぞと云ふに愚痴である痴闇の心體には慧明なきが故に無明と名くるのであります、此根本より諸の業煩惱を起すのであるから業煩惱の事も無

明と名けます。

無明は一切迷の根本たる愚痴と云事に究りが付たら愚痴の黒闇を退治して下さる如來のお智恵を知らねばならぬ、そのお用きの強きを拙衲が印度在學中に大象の御者に感じた事がある、象は御承知の如く動物中最も強猛なるものにて一度彼が怒りを生ぜば他の猛獸をして畏縮せしむるのであるけれどもその大象を御するに巧みなるを見るに、大象が御者か御者が大象か何う見ても一體にて別體とは思はれない程進退動止自由自在なものです、是は大象の働きにて大ひなる身體を輕く振り回すのではない、御者の働きが大象に乘り移りて大象が能く働くのであると云ふ事が明かに知られました、それと同時に佛智不思議の御作用によりて我等凡夫も佛願を信じて念佛すれば人中の芬陀利華と諸佛に譽められるのであると云ふことを深く感じました。

無明ノ闇ヲ破スルユヘ智恵光佛トナヅケタリ電燈も闇を破る働きあれども限りある一部分を明るくするのみである、太陽に至りては部分的照破ではない山河溪

谷大海廣湖草木鳥獸有情非情全世界を照して闇を破る働きがあると云ふに異論はない、けれども太陽は夜を照破することなき片照の不滿足は免がれない、今云ふ所の智恵の光明は一たび無明の闇を破れば夜をのこすと云ふ事なき滿足の太陽であります、依て十方三世の諸佛聲聞緣覺菩薩等の皆々樣が口を揃へて御讚嘆なさるゝのであるから、一切諸佛三乘衆トモニ嘆譽シタマヘリと御讚述遊ばしたのである、御草稿の御左訓に一サイノシヨブチノチエヲアツメタマヘルユヘニチエクワウトマフス一サイシヨブチノ佛ニナリタマフコトハコノアミダノチエニテナリタマフナリと遊ばしてあるにていよ〳〵明了になります。

嘆譽とは上智恵光佛のお德に對してのお言葉なれども若し下我等衆生が一切諸佛三乘衆のお言葉を聞くとする時には所謂說微妙法である、又大經の金言によれば無量壽佛の光明顯赫にして十方の諸佛國土を照耀し給ふ聞かずと云ふことなし但我今其光明を稱するのみならず一切の諸佛聲聞緣覺諸の菩薩衆咸共に嘆譽し給ふこと亦復是の如し、若し衆生ありて其光明の威神功德を聞て日夜に稱說して至

心に斷へざれば意の所願に隨て其國に生るゝ事を得て、諸の菩薩聲聞大衆の爲に共に嘆譽し其功德を稱せられんと說き給ひてあればこの嘆譽は凡夫に通ずるとも申されます。

光明テラシテタヘザレバ
不斷光佛トナヅケタリ
聞光力ノユヘナレバ
心不斷ニテ往生ス

此一首は初の二句は光明に就てのお示し後の二句は信心に就てのお示しと云事は一度拜讀すれば直ぐ分る、第一句の光明テラシテタヘザレバとは如來の光明は過去も現在も未來も更に御油斷なくお照し下さるのであると云事を顯はし、夫ちやから不斷光佛と名け給ふと第二句を成じ光明テラシテタヘザレバ不斷光佛トナヅケタリとは常恒不斷のお德を顯はし給ふものと知れば宜し。

如來の光明には常光と現起光の二がありますが只今は常光なること明かです、

何故なれば善導大師は觀念法門に常照是人と釋せられ又惠心僧都は往生要集中本に大悲無倦常照我身と仰せられてあります、和讃に煩惱ニマナコサヘラレテ攝取ノ光明ミザレドモ大悲モノウキコトナクテツネニ我身ヲテラスナリとありて常にとあるにて常光なることを知るに足ります、此一首を折半して前半は回向門後半は正因門と辯じた學者もありますが、成程光明照しての二句は前の道光明朗以下三首に於て貪瞋痴の三毒を退治し給ふ所の清淨歡喜智惠の三光の照益により三惡道を免がるゝ事を、横に並べて知らせて置て此に竪徹三世の不斷光諸佛世界に比類なき本師法王のお手柄を擧げ給ふたは回向門に相違ありません、斯樣にお手柄强き彌陀大悲の誓願に助けられ救はるゝと聞信した信心は卽得往生の密益を受け現生正定聚と不退位に定まり、見事に往生成佛の大果をうるといふ事にて聞光力ノユヘナレバ心不斷ニテ往生スと仰せられたは全く正因門であります。

不斷光の力を聞て信じた信心なる故に相續して不斷とならねばならぬ道理である、又信心相續し心不斷にて往生するので御油斷のなき不斷光佛在ます事を益々

信じて一念の疑心なく往生成佛が出來る、何れより回りてみても自力の働きいらぬ道理が分明になります、聞光力とは不斷光佛の力を聞くと申す事で不斷光佛とは例の三十七名の隨一にて十二光佛の第九なる事は申す迄もない、前に遇斯光の下にてお話致せし如く佛の外にないが光明なり依て聞光力の御左訓にミダノオンチカヒヲシンジマイラスルナリと遊ばしてあります、又御草稿の御左訓にモントイフハキクトイフキクトイフハホフヲキヽテシンジテツネニタエヌコヽロナリと仰せられ、不斷光佛が所信なる故に能信亦不斷なるべきは道理必然と云事おのづから顯はれてある御左訓と伺はれます。

心不斷ニテ往生スと云ふ此不斷に二樣の頂き方がありまして聞光力と諸佛不共の御誓約を聞て信ずる信者は善きに付惡きに付、何に付彼に付大悲深重の御恩を思ふと云相續側からみますのと、又貪欲の荒波立つも瞋恚の熾炎起る中から少しも滯りなくお淨土に向ふて道中するのぢやと云憶念の信體よりみるのとの二樣です、今は一念の信心に問斷せず一期相續して往生させしめ貰ふ所の不斷常卽憶念

の信體を不斷と伺ふことであります、御左訓にミダノセイグワンヲシンゼルコヽロタヘズシテワウジヤウストナリと仰せられてある。

佛光測量ナキユヘニ

難思光佛トナヅケタリ

諸佛ハ往生嘆ジツヽ

彌陀ノ功德ヲ稱セシム

佛光とのみ聞く時は十方三世の諸佛に通じての事にも思はれませうけれども、測量ナキユヘニと云お言葉を聞けば並々の佛光ではないと云事に心付きます、横遍十方の光明の持主なるが故に阿彌陀佛を無邊光と申上げ、竪徹三世の光明の持主なるが故に阿彌陀佛を無量光と申上てありませう、此樣なお德はかれこれ凡夫の計らひ知ることの出來ぬは勿論、聲聞や菩薩のお方々でも測知なさる事は叶はぬ、故に經に二乘非所識唯佛獨明了と說きて佛の外には不可能である。

されば諸佛は測量して此樣なものぢやと尺度を究め給ひたかと云ふに左樣でな

い諸佛の知り給ふと云は本佛彌陀の光明はその德測り知る譯のものぢやないと測知せられたのであると伺はれます、測量の御左訓に其所をお述なされましてシキハハカラヒノキワナキヲイフリヤウハカズヲシルヲイフナリと仰せられ、又難思光佛の御左訓にスベテコヽロノオヨバヌニテナンジクソウブチトイフナリと仰せられてあります。

本偈に其光除レ佛莫ニ能測一、故佛又號ニ難思光一、十方諸佛嘆ニ往生一、稱ニ其功德一故稽首とありますが、今の一首の和讃と眞字假字の相違こそあれお意は寸分違ひませぬ、本偈の四句そのまゝが和讃の四句と成た寫眞であると申すは第一句の其光除佛莫能測を佛光測量なき故にと和述し給ひ、第二句の故佛又號難思光を難思光佛となづけたりと和述せられ第三句の十方諸佛嘆往生を諸佛は往生嘆じつゝと和述し給ひ、第四句の稱其功德故稽首を彌陀の功德を稱せしむと和述せられたるものと云事判然でせう。

斯く配當致して初の三句に異論はないが第四句の彌陀ノ功德ヲ稱セシムと和述

し給ひた祖意が了解し兼ると駄々を捏る人があるも知れない、けれども此所が誠に有難き思召のあるので第三句に諸佛ハ往生嘆シツゝとあるは我等の往生を諸佛がほめて下さるのであるが難思光の難思光たる所以と云は他に非ず、我等凡夫をして報土に往生せしめ給ふにありとお德を顯はして下されたのみならず、その衆生の往生を諸佛が嘆じ給ふ事になる本源は全く阿彌陀佛の威神功德不可思議なれば、只今は本源に歸して彌陀ノ功德ヲ稱セシムと能讃の諸佛が御自身が本佛のお德を嘆じ給ふのみでない、我等凡夫に斯樣なお德ある本佛に歸せよ本佛を嘆ぜよと勸讃し給ふ思召をお知らせ下されたのであります。

此兒は行儀も善いが學校の事も能くお出來なさる小學校中多くの生徒あるも右に出る者一人もない、珍らしき寧馨兒であると譽めて其人が更に云樣、萬事に拔目なき親御達が始終家庭教育の任を取て居られるからぢや彼家庭程何事にも調子の揃ふたを他に見聞しない。と初めは其兒を譽めて後に其親を譽ると云順序は世間に此類多くありませう、今も諸佛が我等凡夫が阿彌陀佛の光明の威神力により

て報土往生する事を讃嘆して、是只事でない本佛のお蔭であると本に歸して諸佛ハ往生嘆ジツヽ彌陀ノ功德ヲ稱セシムと仰せられたのであります、されば愈よ諸佛に嫌はれた我等凡夫も難思光佛とある如來に歸命し奉れば報土往生間違なしと露塵程も佛智を計らはず仰せの儘をお受申す事に成たのが此御和讃を全領せられたる眞宗の門葉と云のである。

神光ノ離相ヲトカザレバ
無稱光佛トナヅケタリ
因光成佛ノヒカリヲバ
諸佛ノ嘆ズルトコロナリ

本偈に神光離レ相不レ可レ名、故佛又號ニ無稱光一、因レ光成佛光赫然、諸佛所レ嘆故頂禮とありて、是も偈文の四句が和讃の四句と成たものにて堅き漢文が柔かき和文に代りたと云ふ譯である、先神光とは經文に威神光明最尊第一と說き給ふ如く不可思議の光明何とも云ひ樣のない優れた光明が神光である、離相とは諸佛方に於

て云ひ開き給ふ事の出來ないと申す事、世に藝の優れたるを譽るに中々離れ技をすると申しませう、彼離れたと云ふ一言の中に何とも述樣のない計られぬ所作であると云ふ意を含であるに相違ないと思ふ、永不成佛必墮無間と三世十方の諸佛に投出された我等凡夫を罪業の塊を、其儘一念歸命の下に往生成佛させて下さる阿彌陀佛の藝術は離れ技でありませんか、依て諸佛も只不思議々々々と御讃嘆なさるのであるが故に神光ノ離相ヲトカザレバ無稱光佛トナヅケタリと仰せられたのであります、御左訓にムゲクワウブチノオンカタチヲイヒヒラクコトナシトナリと仰せらる、是經文に無量壽佛光明威神巍々殊妙晝夜一劫尙未能盡と說き給へるのおこゝろである、大聖釋尊の如き無碍辯をお持ち遊ばして有ても說き盡されぬとのたまふ程の無稱光佛が我等の親樣だと聞たら信ぜずに居れませぬ、一切の諸佛が本佛の離れ技には不思議と譽るより云ひ開くべき言なしと讃嘆なされる無稱光佛がお救ひの法王であると聞たらたのまずには居れない。

因光成佛とは御左訓にヒカリキハナカランントチカヒタマヒテムゲクワウブチト

ナリテオハシマストシルベシと仰せられ、又御草稿の御左訓にヒカリヲタネトシテホトケニナリタマヒタリと仰せられてあるより伺へば彌陀の成佛なる事は明かですが、經文に至て其然後得ニ佛道一時上普爲ニ十方諸佛菩薩一嘆ニ其光明一亦如レ今也と說き給へるによれば衆生の成佛と伺ふも敢て差支なき樣にもある、その時は因光成佛は衆生が阿彌陀佛の光明力によりて佛に成りし事となります、然れども前の和讃に末の往生を本の佛德に歸し給ふ如く衆生の成佛も本に歸すれば彌陀の成佛の德なる故、只今の當面は御左訓の通り彌陀の成佛と伺ふて置ねばならぬことでせう。

乃で阿彌陀佛とはいかなるお方ぞと云ふに因位法藏比丘たりし時我等衆生の底知れぬ無明の闇を破りて、悟らせ度とて我等の爲に程の指せぬ無量無邊無碍の光明を成就し給ひ、我も諸佛に無稱光佛と讃嘆せられる事になり一切の衆生も無稱光佛にせねばならぬとの、御誓願より遂にその願成就して正覺を取り給ひた佛を阿彌陀佛と申奉るのである、此樣な解釋は三歲の童兒でも知て居ると云ふ人もあ

らうが、知て居ても信じて無稱光佛になる將來を樂む身にならねば知た甲斐はありませんでないか、只今此和讃を拜讀し拜聽する時無稱光佛を諸佛が讃嘆なさるゝものと頂けども、信者の身は程なく往生成佛させてもらへば因光成佛のひかりをば諸佛の嘆ずるとは私が諸佛に讃められる事となる譯ぢやもの、近き現益の慶喜は申すに及ばず遠き當益の歡喜も起りて喜びあきのない仕合、これは耳にきくのみにて信じない者に味ひの知れる筈はない。

光明月日ニ勝過シテ
超日月光トナヅケタリ
釋迦嘆ジテナヲツキズ
無等等ヲ歸命セヨ

本偈に光明照曜過ニ日月一、故佛號ニ超日月光一、釋迦佛嘆尙不レ盡、是故稽ニ首無等等一、とあり是亦其儘を和述し給ふ事判然と申して宜しからう、只偈になき所の歸命せよと云ふお言葉のあるが相違點である、併これは上の御和讃皆此例にて本偈は稽

首頂禮として身業禮拜を示され、宗祖聖人はそれを歸命は禮拜なりと云邊から稽首頂禮に代へて歸命をお用ひに成たのです、然も禮拜と云ものは舂杵の上下する如き無意味なものではない廣大難思の佛恩を思ふて禮拜せよ、禮拜するには先所拜の彌陀の的を忘れず歸命せよと畢竟一念歸命の根元に就ての信心をお勸めなさる思召より、歸命せよ〳〵と遊ばして稽首せよ頂禮せよとは仰せられなかつたのであらうと伺ひます、下の妙土廣大超數限の和讃に一ケ所稽首歸命セシムベシと稽首の文字が出てあるのみ。

此和讃は十二光德を御讃嘆遊ばした最後の超日月光にして上の十一光は皆悉く直ちに光德に約して御讃嘆なされてあれども此一光は直顯にあらずして比顯である、比顯と申すは我等凡夫の知て居る所の物に寄せてお德を顯はして下さる事です、男女と云はず貴賤と云はず老少と云はず日月の光りを知らぬものはなからう魚目も光り朽木も光り毒茸も光り禿頭も光り金銀も光り電氣も光る、多數の光りある中に日月に超過する光りは我々の知る所に於ては無い事必定でありませう、

乃で世間に第一等の日月を擧てこの日月の光明に勝れて超過したのが阿彌陀佛の光明であるぞよと比顯して下されたのであります。

世間の日月は外を照せども內を照さず佛の光明は內外共に照し給ふのである、世間の日月は一方を照して他方を照さねども佛の光明は諸方を照し給ふのである、世間の日月は晝を照し或は夜を照し片照なれども佛の光明は晝夜を照し給ふのである、依て御草稿の御左訓にムゲクワウニヨライハツキヒニスグレタマヘルヒカリナルガユヘニと仰せられてあり、上無量光より無邊光無碍光無對光炎王光清淨光歡喜光智惠光不斷光難思光無稱光と漸々御讃嘆ありて今は第十二の超日月光に至り、手近く知れ易き日月に比顯してお結びなさるものは敢て日月に超過すると云ふに止まるのではない、その意三世十方の諸佛の光明に勝れ給ふ阿彌陀佛の光明なりとの思召は含であるのですから次に釋迦嘆ジテナヲツキズと仰せられてある、此釋迦嘆じて猶盡ずとあるお言葉は大經に於て我無量壽佛の光明威神巍巍殊妙なるを說んに晝夜一劫すとも尙未だ盡きずと釋迦如來が御讃嘆遊ばしたこ

の意である。

晝夜一劫尙未能盡のお德ある阿彌陀佛の光明によりて無始以來の昏闇無明長夜が一時に晴れて、一念歸命と心落付き後生の一大事に一點の疑闇なく末明るく歡喜の稱名申しつゝ娑婆の世渡りまで道を曲らず進ませて頂く、從冥入冥が從明入明と轉じ換り智者が苦む事柄に逢ふても愚者乍ら夫を苦とせぬのみならず却て佛恩を仰ぎ喜ぶ助緣にすると云仕合、皆是如來の光明のお蔭である斯樣なる御德を持たせらるゝ無等等を歸命せよと結び止めて下されたのである、無等と云は因位の菩薩の及ばぬ諸の菩薩の及ばぬ所と云事で佛を無等と申します、後の等は因位の菩薩の及ばぬ諸佛の又及ばぬと云ふ比類なき事を顯はした文字で阿彌陀佛を無等等と名け奉るのであります。

御草稿の御左訓にヒトシクヒトシキヒトナシと遊ばしてありまして並べ比べのない阿彌陀佛の光明であると云事を名に顯はしたのが無等等と合點すれば宜し、斯樣に勝れ給ひた阿彌陀佛に歸命せずして他に歸命すべき佛がありませうか、我

々は幸ひに宗祖聖人の門下に育ち明ても暮ても正信偈和讃を拜讀して居るのですが馬耳東風に成てはならぬ、既往はともかく只今聖人の御勸誘に應じて苦のないお念佛を申しませう。

彌陀初會ノ聖衆ハ
算數ノオヨブコトゾナキ
淨土ヲネガハンヒトハミナ
廣大會ヲ歸命セヨ

最初の彌陀成佛より十三首は主莊嚴の阿彌陀如來に就て廣大難思の德を御讃嘆なされたのでありますが、此彌陀初會ノ聖衆ハよりは伴莊嚴と云ふべき佛德を御讃嘆遊ばすのであります、先初に大悲の御親の拳臺開きでさへ所化の聖衆の數多きこと算盤玉に載せるには不可能である廣大會で有たと知らせ給ひ、盡未來際末永く通して御繁昌の瑞兆をお擧げに成た譯です、斯樣に讃嘆しても〳〵讃嘆し飽きのないお德を持ちつゝ淨土を構へて待わび給ふ大悲の御親をたのみて淨土往生

を遂げて吳よと御親切に御勸め下さるのである。

本偈には阿彌陀佛初會衆、聲聞菩薩數無量、神通巧妙不能算、是故稽首廣大會とあり、和讃の上と照し見るに淨土ヲネガハンヒトハミナと云ふ句に相當すべき偈文がない、いかなる理由であらんと申すのに成程偈文には適當の文なし是は初會の聖衆の數多きことを擧げ給へる所以は本佛の彌陀のお德の勝れさせられてある事を顯はすので有て、斯樣に勝れた彌陀の淨土へ往生する心はなきや定めてあるであらうと、行者をして彌陀の淨土を願はしむるの意は偈に十分含であるもの故に、宗祖聖人は其意を開き顯はして一句と爲し給ふものと伺ふて差支はなからうと思ひます。

過去七佛の御說法の事が增一阿含經に出て居ますがその經說によりますと三會の御說法にて御涅槃に入らせられた佛もあり、第二會或は第一會にて御涅槃に入らせられた佛もあります、釋迦如來は二會や三會ではない四十九會の御說法にて御涅槃に入らせられましたけれども四十九會と云ふ限りが有た、ともかく應身佛

は長短の差異こそあれ御涅槃に入らせられぬ佛はない今此和讃の初會と云は第二會第三會の後が出てない、畢竟無量會にして御涅槃はない盡未來際の御繁昌なる報佛報土であると云事をお知らせに成た所、いよ〳〵仰ぐべき眞價を喜ばねばなりませぬ。

初會以來二會三會十會百會千會萬會十萬會百萬會千萬會一億會乃至無量會と無限なれば、初會ありて第二會第三會の後を擧げ給はぬは道理至極でありませんかその初會にすら算數の及ばぬ所の聖衆がお集りになりしこと故御草稿の第一句の御左訓にアミダブチノホトケニナリタマヒシトキノミデシノオホクオハシマスコトナリと遊ばされ、又第二句の御左訓にアンラクジヤウドノシヤウジユノカズキハナクオホシトナリと遊ばし、又御淸書の第一句の御左訓にミダノブチニナリタマヒシトキアツマリタマヒシシヤウジユノオホキコトナリと仰せられてあります何れも算盤にかゝらぬ數なるを知らせ給ひたのである。

某學者の說に一微塵とはどの位のものぞと云ふに至極微小の物にて一分四方の

圏内に四千萬を容るゝと申してあれば世界に微塵の數を算ふるものはあるまい、夫と同様に彌陀初會の時にお集りに成たお弟子の數も算數の及ばぬ無數無量で有た、大經に佛阿難に告給ふ彼佛の初會の聲聞衆の數稱計すべからず菩薩も亦然なり今大目犍連の如き百千萬億無量無數ありて、阿僧祇那由他劫に於て乃至滅度まで悉く共に計校し多少の數を究了すること能はず、譬へば大海の深廣無量ならんにその一毛を折て百分しその一分の毛をもて一滴を沾取せんが如し、意に於て如何ぞ其滴る所の水を大海に比するに、多少の量巧歴算數言辭譬類の能く知る所に非ざるなり、佛阿難に語り給はく目連等の如き彼初會の聲聞菩薩を計らんに知る所の數は猶し一滴の如し其知らざる所の數は大海の水の如しとお說き遊ばしてあります、此様なる弟子を有せられる如來が我等凡夫の御親と聞てたのまずに居れませうか、依て宗祖聖人は御親切に廣大會を歸命せよとお勸め下さるのですから仰せに順ひませう、然すれば今にも娑婆の緣盡き次第御繁昌のお淨土へ乘り込むことが出來るのであると遠く末を見るよりも、今一息々々が淨土行の道中をして

居るのであると思へば踊り立つ感あり。

安樂無量ノ大菩薩
一生補處ニイタルナリ
普賢ノ德ニ歸シテコソ
穢國ニカナラズ化スルナレ

前の彌陀初會の聖衆は伴莊嚴たる菩薩の數の多きことを總じてお擧げ遊ばしたものです、今は安樂無量の大菩薩一生補處ニイタルナリ西方彌陀のお淨土の土德にて、伴莊嚴の菩薩といへども內證も外用も彌陀と替らぬ不思議力を圓滿してまします事故、十方界へ出でゝ恰度釋迦佛陀の後を彌勒菩薩が受繼なさるが如き、前佛同様の衆生攝化の利益を施し給ふ大菩薩がお育ちになるのであると云事を顯し給ひたのである。

普賢ノ德ニ歸シテコソ穢國ニカナラズ化スルナレとは還相回向の利益をお知らせ下されたのであるが、とにかく此一首は二十二願の意をお述べ遊ばしたと云事

は明了にして二十二願には一生補處と還相回向と云二の願事があります、それを容易く四句一首の和讃にしてお知らせに成たので初の二句が一生補處後の二句が還相回向一目瞭然と申されますことである、安樂淨土の大菩薩は淨土にありては主佛の彌陀と同じく虛無之身無極之體の自由自在の身を以て而して從果向因の菩薩となり一生補處の位に住し、他方に出てゝ普賢大悲の德をもて一切衆生を敎化し給ふと云へる事如斯御相談なされて居る、之を客觀的にみて居らずお互ひも報土往生の素懷を遂げた上は此中に加はるのであると思はれるでせうなんと愉快でありませんか。

普賢の德の御左訓にダイジダイヒヲマフスナリと遊ばし、又御草稿の御左訓にソレラシユジヤウゴクラクニマイリナバダイジダイヒヲオコシテ十方ニイタリテシユジヤウヲリヤクスルナリ佛ノシゴクノジヒヲフゲントマフスナリと遊ばしてあります、此思召から伺へば此世にありては鬼を欺き夜叉より劣る强慾一點張の我々も、無常の風に吹き飛ばされて四大假和合の家の離散する時信心の主人は極

樂淨土に生れ出てみると、淨土の土德として煩惱菩提體無二と思ひもよらぬ佛心者大慈悲是と成て、十方衆生を思ふがまゝに濟度することの出來る仕合が手に取た樣明かに知られて有難きことでありませんか。

唯信抄文意に曰く

コノサトリヲウレバスナハチ大慈大悲キハマリテ生死海ニカヘリイリテヨロヅノ有情ヲタスクルヲ普賢ノ德ニ歸セシムトイフナリ。

何れから頂きましても顏しかめる所は少しもない何たる愉快な事であらうと末賴母しく思はるゝのが信者の身の上である、一寸したお言葉でも心を付てみねばならぬ今普賢の德に歸してこそとあるコソは簡擇の言にして其は何に簡ぶぞと申すに、穢國に還來するは退墮するのではない普賢大悲の德に順じ衆生を濟度するためであることをお知らせ下されたのである。

本偈の文は安樂無量摩訶薩、咸當一生補二佛處一、除下其本願大弘誓、普欲上度二脫諸衆生一、斯等寶林功德聚、一心合掌頭面禮、と云六句なり、涅槃に入り給ふ事な

き無量壽の阿彌陀佛に一生補處の大菩薩は要らぬではないかと云ふ俗問がある所なれども、是は成程彌陀の淨土は一生補處の迹繼ぎはいらぬ事必定なれども一生補處と云は他方に至りて十方世界に佛處を補ふべき德を具へて前に申した如く出世して衆生を化益し給ふのであります。

本師の阿彌陀佛正覺成就の拳臺開きとも云べき彌陀初會の御說法から算數の及ぶことぞなき廣大會で有たが、その廣大會中の菩薩亦一生補處普賢大悲と本師の彌陀に負けず劣らない、自利々他圓滿なるその根源は皆是阿彌陀佛の淨土の土德として顯はるゝものと仰がねばならぬのであります、立派な花が咲きましたことね能くまあこんなに枝が榮へましたねと譽めた枝葉も悉く根元の肥料の力で有たと知られませう、斯くお話をする拙衲も聽聞して下さる皆さんもたゞ御恩を仰ぐより外はありません南無阿彌陀佛。

十方衆生ノタメニトテ
如來ノ法藏アツメテゾ

本願弘誓ニ歸セシムル
大心海ヲ歸命セヨ

この和讃の本據の偈文は安樂國土諸聲聞、皆光一尋若ニ流星ノ菩薩光輪四千里、若ニ秋滿月映ニ紫金ノ集ニ佛法藏ノ爲ニ衆生ノ故我頂ニ禮大心海ノと云六句なり、此偈文の中にては何れが肝要なる所であるか素人眼をもて覗く時は初の二句なりと云ひ兼ぬ、所が左樣でない流石に大心海化現の聖人宗祖の御見識によりて肝要を見出して下されたが第一の十方衆生ノタメニトテと云一句にあり、是に依て偈文の肝要は集佛法藏爲衆生の七字にあると云事明了になります。

此一首は次前の安樂無量の大菩薩の一首と意味通貫して第二十二願還相攝化の相をお知らせ下されたものと頂かねばなりませぬ、斯樣に定めて伺ふてみると益く深妙の味が出まして元來彌陀如來には御涅槃はなけれども、恰度釋迦如來の後に彌勒菩薩が迹を繼ぎ給ふ樣に諸佛世界へ手分けして、淨土の菩薩が何處へでも御出世になり迹を繼せらるゝ其お德は本佛の阿彌陀如來に替らぬのであると云事

をそれとなくお示し遊ばしたものと伺ふて差支ないと信じます。

集佛法藏爲衆生の七字が十方衆生ノタメニトテ如來ノ法藏アツメテゾの二句に成てある事は一目燎然でありませう、乃で淨土の菩薩が諸佛の淨土に往き給ひて佛を供養し衆生を化度し、自利々他の功德を積集なさゝ事が如來ノ法藏アツメテゾと申す事、而してみれば本願弘誓と云のも菩薩の本願弘誓と云べき道理なれども、それを阿彌陀佛の御本願超世希有の弘誓とし給ふが祖意故に歸セシムルと云ふ言に改め、嚴かに大心海ヲ歸命セヨと三四の二句をお造り遊ばされたのであります。

大心海とは三十七名中の隨一にして阿彌陀佛の德號であります、何故大心海と御名が出來たかと云ふに御草稿の御左訓にブチノオンコヽロノヒロクフカクキソホトリナキユヘニアミダヲバダイシンカイトイフナリと遊ばしてあるにて明了であります、大心海は大慈悲心海の略稱と申してもよからう淨土の聖衆が十方衆生を化益せんと思召すそのお心は他にあらず、全く阿彌陀佛の大慈悲より發起せしむるものなるが故に今は攝末歸本し給ひて三十七名ある中の大心海を擧げて歸命せよと結勸したまひたのである。

觀音勢至モロトモニ

慈光世界ヲ照曜シ

有緣ヲ度シテシバラクモ

休息アルコトナカリケリ

本偈の文に又觀世音大勢至、於二諸聖衆一最第一、慈光照二耀大千界一、持二佛左右顯二神儀一、度二諸有緣一不二暫息一、如二大海潮不一レ失レ時、如レ是大悲大勢至、一心稽首頭面禮とあり、觀音勢至の二菩薩は聖衆の中に殊に勝れさせられたお方なる事は明かでありて、俗に阿彌陀樣の兩腕と云觀音樣は慈悲の腕勢至樣は智惠の腕此悲智が阿彌陀に離れずまします故に、大經には又二菩薩最尊第一とお說き遊ばしてある此經文におよりなされたが曇鸞大師の偈文なり。

觀音は大悲攝取門勢至は大智折伏門この二菩薩が我等凡夫の徒らものを撲たり

撫たり御介抱下さるのである、その御介抱のお蔭と云ふは我等凡夫として善知識御教示の下にいつのまにやら信心堅固の身と成て、浄土往生に疑なきに至る智恵と云はずして何と申しませうよ、信心の智恵にいりてこそ佛恩報ずる身とはなれ信心の智恵なかりせばいかでか涅槃をさとらまし皆是お蔭を蒙る證據です、味よき物なら一人で口へ入れて仕舞度身が誰彼れに差別なく法味を嘗め合て安養浄土に往生せんと、手を引合と云ふ心は凡夫の地體にある筈がない全く御介抱のお蔭であると云ふが判りますでないか。

慈光とは觀音勢至二菩薩の慈光を指し給ふに相違ないけれども其光體を云へば本佛彌陀の慈光にして二菩薩の化益卽是本佛の大悲を行じ給ふのである、世界とは經に三千大千世界と說き偈には大千界とありとにかく此世の日月が晝夜間斷なく我等を照し給ふ如く、阿彌陀佛の慈悲と智恵とが心の底を照してお休みがない畢竟彌陀同體の佛に仕上て下さる事をお知らせ遊ばされたのであります何れより頂くも御恩々々と申上る外ありませぬ。

有緣ヲ度シテシバラクモ休息アルコトナカリケリ經に有緣衆生皆悉得見と說き給ひて、我等は何たる仕合ぞや何一つ覺へのなきものが一念歸命の時迷ひの戸籍を脫して浄土の人別に加へて下され、現に正定聚不退轉と思ひもよらぬ稱讚を受ることは暫くも休息なく慈光を以て御介抱下されし御大恩であります、斯く頂く上は遠く五劫思惟の御恩近く九十年の祖恩を忘れず報謝の大行を務めつゝ進みなば、自ら常行大悲の益に適ふて二菩薩と肩を並ぶる當益のみならぬ現に廣大の利益がある嬉しきことでありませんか。

安樂浄土ニイタルヒト
五濁惡世ニカヘリテハ
釋迦牟尼佛ノゴトクニテ
利益衆生ハキハモナシ

偈には其有二衆生一生二安樂一、悉具二三十有二相一、智恵滿足入二深海一、究二暢道要一無二障碍一、隨二根利鈍一成二就忍一、二忍乃至不可計、宿命五通常自在、至レ佛不レ更二雜惡

趣ニ除ク生ニ他方五濁世ニ示現同如ヰ大牟尼上生ニ安樂國ニ成ニ大利ニ是故至心頭面禮、と
あり、是が此和讃の本據である本據の偈文は長けれども今の一首の和讃としてそ
の意を洩さず御教化下されてあります、花は開かねども芳芬は確かに持て居ます
未だ滅度はさとらねども信心の人に供養諸佛開化衆生の幸福は馥郁として具はる
のであります。

安樂淨土ニイタルヒト此一言を承はりても誰のことぢや知らぬと餘所事にして
居る身は鹿の角を蜂が螫す樣に何の感じもなく聞き流すであらうが、佛願を信じ
念佛を申すことに成た身ならば是はと耳を澄まして謹聽する氣になるでせう、假
令夫までに至らずとも後生を大事に思ふ身ならば耳傾けずには居られぬ筈乃で宗
祖聖人が只今聳へた不二山の話位ではない、超諸佛刹最爲精と諸佛淨土に超へ勝
れた淨土に至り豫て舊住の觀音勢至と替りなき新往の菩薩となれよとの御親切を
以て、高きお聲で安樂淨土に至る人との一首をお聞かせ下さると有難くお受申し
ませう。

安樂淨土に至る人となるは六ヶ敷ことか釋迦牟尼佛の如くにて衆生を利益する
事になるは面倒かと云ふに、此二利圓滿を自力にて造らうとしたら其は六ヶ敷の
面倒のと我等が口にする所ぢやないとても叶はぬことなるに定りて居れども、善
知識の教示を私なく一念信ずる立所に一念慶喜一念歡喜と一の信心の手に現益と
當益の二益の花を持たせて下さるが他力門の特長ですから何も六ヶ敷事はありま
せぬ、故にあら心得やすとも仰せられてある斯樣に幸福を客觀的にお淨土の伴莊
嚴なる新往の菩薩の事にして我々にお勸め遊ばしたのが此一首であると伺ふて宜
しからうと思ひます、今にも娑婆の緣盡て淨土に至りし時は神力自在の働きより
諸の其界に飛行し、別して無佛世界の野蠻人を片端から茨を刈取て良田とする如
く、十方衆生を思ふがまゝに濟度化益を爲し得るは偏へに彌陀他力の本願を信受
奉行するに限るぞよとの思召を簡單にこの一首に遊ばされたのである、誠に有難
くもあり尊とくもある和讃でありませんか、還相の利益中只今の一首は利他の方
を顯はし給ひ次の神力自在の一首は自利の方を顯はし給ひたのであります、共に

これ新往の菩薩の二利のお徳を讃嘆して如是の身になれよとの御勸告とお受け申上ませう。

神力自在ナルコトハ
測量スベキコトゾナキ
不思議ノ徳ヲアツメタリ
無上尊ヲ歸命セヨ

偈に安樂菩薩承二佛神一、猶二一食頃一詣二十方、不可算數佛世界一、恭二敬供一養諸如來一、華香伎樂從レ念現、寶蓋幢幡隨レ意出、珍奇絶世無二能名一、散レ華供養殊異寶乃至神力自在不レ可レ測、故我頂禮無上尊とあり。

神力とは玄讃に妙用無レ方曰レ神、威勢能摧曰レ力、とあり、自在は自由と相通じて思ふまゝと云事である、測量スベキコトゾナキとは御左訓にハカリハカルコトナシトナリと示してあるを頂けば十分であります、此一首は前にお話申した通り新往の菩薩の自利々他の益の中自利の益にて淨土へ往生遂げた念佛往生の大菩薩

の身は豫て舊住の觀音勢至等と替りなしと申すばかりぢやない、自利に於ては彌陀同體の德を具へ利他に於ては釋迦同樣の用きを得るのであると、それは〳〵肉躍り魂飛ぶの妙境界なるぞよとの意を顯はしたが經文及偈文であるは明了です、華香伎樂念に從ふて顯はれ珍奇絶世能く名くるなし花を散して供養する殊異の玉化して華蓋となり光り晃耀たり香氣普く薫じて周ならざるなし、華蓋の小なるもの四百里乃遍く一佛界を覆ふありその前後に隨て次で化し去るこの諸の菩薩みな忻悅す、虛空の中に於て天樂を奏す雅讃德頌佛惠を揚ぐ經法を聽受し供養し已れば未だ食せざるの前虛空に騰りて還るとは愉快ならずや。

只今は右等の事柄を悉く不思議の德をあつめたりの一句に收め給ひたばかりぢやない、廿二廿三廿四の總別三大願をも此四句に卷き込み給ひたのであります、畢竟淨土の菩薩の德とせず根本彌陀如來の不思議力となされ且客觀的にお淨土の伴莊嚴とのみ見るのでないと主觀的に我等に斯樣の德を持たせ、早く不思議力の主と成て吳れよと御教示遊ばしたものであれば此御親切を忘れてはならぬ。

神力自在ナルコトハ測量スベキコトゾナキとは一切諸佛が威神功德不可思議と讃嘆遊ばす阿彌陀佛のお手際をもて超諸佛刹最爲精の極樂淨土を建立し、來れよたのめよと招喚し給ふと云ふ阿彌陀如來の御德を御讃嘆なされたのである、左樣な超諸佛刹最爲精の主佛が諸佛の測量出來ぬ不思議力にて諸佛のすて給へる强剛難化の徒ら者を、見事な佛にして下さる因位のお骨折が不思議ノ德ヲアツメタリの一句に自ら表はれてあります。

右はもとより攝末歸本し菩薩の德を本佛彌陀佛の德としての御讃嘆なる故に斯樣な御德をお持ち遊ばしてある彌陀に歸命せよ、歸命すれば彌陀同體の佛果を得て此通りの神力自在なること測量すべからざる身になるぞよとお勸め下さるのであるから、無上尊を歸命せよと三十七名の隨一たる彌陀佛の尊號を擧げて所歸を御指示遊ばされたものと尊仰すべく仰信すべしである。

安樂聲聞菩薩衆
人天智惠ホガラカニ

身相莊嚴ミナオナジ
他方ニ順ジテ名ヲツラヌ

偈に安樂聲聞菩薩衆、人天智惠咸洞達、身相莊嚴無殊異、但順他方名天人、とあるが今の一首の本據である、安樂とは委く申せば安樂淨土の事なり安樂の二字を冠した淨土なら並々の淨土ではないから彌陀の淨土なること明かなる故次の和讃に平等力を歸命せよと、安樂淨土の主佛卽阿彌陀如來を擧げて結び給ひたのむべきは彌陀如來信心決定して參るべきは安養の淨土なりと御訓示遊ばす御親切があらはれてあります。

聲聞菩薩人天の四種を擧て緣覺を略しあれども緣覺は聲聞に兼てやはり五乘を擧げさせられたものと伺ふべきです、五乘齊入のお淨土一味の悟りを開かせてもらう上は誰れ彼れの階級差別ある筈はない、故にホガラカニ身相莊嚴ミナオナジと仰せられた、乃で一味平等の身相と成たのに五乘の名のあるはいかなる事ぞと申すにその不審を解くのが第四の一句である、是は恰度朝鮮人が眞宗僧侶と成て

戸籍も僧籍も日本人に定りて居乍ら、他から朝鮮人々々々と申して居る如く伴莊嚴の淨土の聖衆を聲聞菩薩衆人天と呼ぶは、元聲聞にてありしお方元菩薩にてありしお方元人と天にてありし方々の舊名を呼ぶのであると云ふ事を他方ニ順ジテ名ヲツラヌと仰せられましたのであります。

論註上十八丁に他方聲聞來生依二本名一稱爲二聲聞一とあります例して知るべし、又方等大集經四十三丁に人之與レ天無レ有二差別一在レ地爲レ人處レ空爲レ天とあり是に由て之を考ふれば淨土の菩薩の大地にあるを人と名け虛空にあるを天と呼ぶの意とも伺はれます、只今我々に於ても往生の業因を云はゞ第十八願悟りの果體を云はゞ第十一願還相回向の用きを云はゞ廿二願、斯樣に因果體用皆是彌陀如來御成就のもの故到達の涅槃も彌陀同體なること道理必然なり、何と氣味よき事でありませう少し鼻が低うてさへ卑下し、僅に毛髮の色變りても心配するのに梅の香を櫻に持たせた美貌と云位ぢやない、三十二相八十隨形好どれが彌陀やら衆生やら寸分違はぬ身相となる仕合、一刻も早く淨土へ移り度心地がする樣である、大經には其諸

の聲聞菩薩天人智惠高明にして神通洞達せり咸同く一類にして形異狀なし但餘方に因順するが故に天人の名ありと說き給ひ、今は引短かに安樂聲聞菩薩衆人天智惠ホガラカニ身相莊嚴ミナオナジ他方ニ順ジテ名ヲツラヌと遊ばされたのであります、智惠ホガラカニとは內證に付て勝德を顯はし身相莊嚴ミナオナジとは外相に付て勝德を顯はす思召であらうと伺はれます、斯う云所になると念佛申さずに居れませぬ。

顏容端政タグヒナシ
精微妙軀非人天
虛無之身無極體
平等力ヲ歸命セヨ

偈に顏容端正無可比、精微妙軀非人天、虛無之身無極體、是故頂禮平等力、とあるが今の和讃の本據である、次前の安樂聲聞菩薩衆の一首にて所證平等の益は明かに成て居ます、その上に今は平等の果の勝れてあること何とも彼とも言舌に

絶したものなることを顔容端政タグヒナシ等と仰せられたのであります、大經の金言には顔容端政超世希有容色微妙非天非人皆受自然虚無之身無極之體とお說きに成てあります、斯様なる大聖の金言鸞師の偈文宗祖の和讃日月星の三光を並べてみる如く明かなるお知らせに彼是云所はあるまいと思ふ、猶御草稿の御左訓にジヤウドノヒトノカタチノヨキコトナリと遊ばされてあります。

曇鸞大師は七高僧の三番目に列せられたお方なりと云事は誰も御承知の通りですが百尺竿頭一歩を拔たお方に違ひないと云は、彼魏の天子蕭王は菩薩と尊稱し神鸞と呼ばれてある宗祖聖人は曇鸞讃に六十有七トキイタリ淨土ノ往生トケタマフソノトキ靈瑞不思議ニテ一切道俗歸敬シキと御讃嘆なされてある、而してみれば釋迦と曇鸞と宗祖と日月星三光の下に九界の粗をはなれた精微妙軀は到底因人の知ること能はざる純一の果海、是が有漏業所感の果體である筈はない故に非人天と仰せられたのである、委く云へば非聲聞非菩薩非人非天と云事なり。

虚無之身の虚無は涅槃のことであります涅槃經に又解脫名曰虚無卽解脫と說て

あり、此意は涅槃の眞理は本來法爾として能作所作に非ず、有漏業所感の體に異り寂然として眞空なるものであれば虚無と云のである、それがみな願力の所作であるから經文には皆是自然虚無之身と自然の字が添ふてあります、自然は願力他力を顯はす文字である又無極體とは無極は虚無と同じく涅槃の事である窮極あることなき佛體の事です、涅槃經に涅槃者卽是無盡と說てあり無盡は卽是無極です御草稿の御左訓にコムシシントイフハキワモナキホフシンノタイナリと遊ばされてある、悉皆金色の顔容端政に心の內を調ぶれば宿命通他心通漏盡通あり身外に現はれたるは天眼通天耳通神足通、かく內外に就て勝德を算ふるは佛說を述るのみ畢竟有無相卽事理融通無碍自在眞如一理、伴莊嚴當體そのまゝが主莊嚴阿彌陀佛である只不可稱不可說不可思議と申す外はありませぬ。

有相に卽して無相なり無相に卽して有相なり實に不可稱不可說不可思議の功德藏なる名號に攝まるのである、天親菩薩は淨土論に一法句として御讃嘆遊ばされ曇鸞大師は論註に身相莊嚴卽法身と釋せられたは此事です、斯様なる廣大の御德

を持ち給ふ勸進元は依怙贔負なきお慈悲の持主阿彌陀佛であるから、早く此御親をたのめよとて平等力ヲ歸命セヨの一句にお結び遊ばしたのである、平等力とは阿彌陀如來三十七名の尊稱の隨一なる故に御左訓にソアミダブチナリとお記しに成てあります、平等力を歸命する一念に有無相卽事理融通無碍自在の妙果を獲得する約定濟となり現に正定聚不退轉と云位を許され、有漏の穢身は變らねど心は淨土に往來して花見るに付月みるに付歡喜の稱名申しつゝ、淨土行の道中をなすことの出來る是が眞宗にお流れを汲む幸福である。

安樂國ヲネガフヒト
正定聚ニコソ住スナレ
邪定不定聚クニヽナシ
諸佛讚嘆シタマヘリ

偈に敢能得生安樂國、皆悉住於正定聚、邪定不定其國無、諸佛咸讚故頂禮、とあるが今讚の本據である本據の偈文には敢て能く安樂國に生るを得て皆悉く正定

聚に住すとありて、正定聚は彼土の益に相違ない然に今此和讚の上では安樂國ヲネガフヒト正定聚ニコソ住スナレとありて、安樂國に至る人とも安樂國に生るゝ人ともない所を考ふれば何うしても此土に於て正定聚に住する現益に成て居ます一寸不審の起らねばならぬ筈です。

若し之を彼土の益と當益に遊ばすお積りなれば前の和讚に安樂淨土に至る人五濁惡世にかへりては釋迦牟尼佛のごとくにて利益衆生はきはもなしとあるに同じく、イタルヒト或は生ルヽ人とあるでせうけれども夫をネガフヒトと未だ彼土に至らぬ所の者、彌陀をたのみ淨土を願ふ行人となされたのは全く正定聚を此土の現益に遊ばしたに相違ありませぬ、是は正依の大無量壽經にてみる時は現當何れにも伺はれる事なれども、異譯の如來會を伺ひますと宗祖聖人の現益と御覽に成たのは佛意に契當して居ると云事が分明に知れます。

如來會には若邪定聚及不定聚不能了知建立彼因故と說てありまして彼因とあるので邪定不定聚と云もの此土に於ての所談なる事明了になりませう、乃で

邪定不定が彼因を建立する事不可能なるに對して正定聚は彼因を建立する事が出來ると云事を反證されますのである、然れば正定聚は此土の益と申す事が判然なりと申さねばならぬ、此異譯にお照し遊ばして正依の大經成就文生彼國者の假名にムマレントスルモノと讀ませられてある、一念多念證文に判然と現生に正定聚の位に住してと仰せられてあるから彌陀をたのむ一念の時攝取不捨のお手柄として他力の信德には、再び迷ひへ返らぬ不退轉正定聚の身と定まると云が我眞宗の流れを汲む仕合と決著致しませう、夫ちやから邪定聚や不定聚の人は眞宗門内に住む事は出來ない、眞宗門内に住まれぬ者なら報土往生は叶ひませぬ報土往生する人は正定聚の人のみです、依て邪定不定聚クニヽナシと仰せられたのであります。

三定聚の事も問云答云と會讀流の御相談になる時は通佛法では斯う云ふ何では斯うぢやと種々お話する事柄があれども、今は來れと呼び給ふ本願一實の大道を進まずに己が自力の手探りに定散の小路を辿る行者を邪定聚と云ひ、又不思議の

佛智を聞き乍ら自分が稱ふる口許位をたのみて能稱の功を募る所の行者を不定聚と云ひ、信じ乍ら稱へ乍ら能信能稱の機功を募らず若不生者のお力をたのみ南無阿彌陀佛〳〵と御恩報謝を相續する、心行ともに佛智の施與にあづかり居るを正定聚と云者と心得れば足るのであります。

邪定聚の邪の字は取れても不の字の冠りてある間は矢張往生不定である往生一定御助治定とひたすら念佛の一行を御報謝に務むる、正行念佛の人に始めて正の字が與へられ正定聚といはれるのである、正の字を受たるものを祝ふて下されたお言にふかく信じて稱ふるがめでたきことにて候と仰せられてある、正の字の受られない者をお歎きなされたお言葉に信心ありとも名號を稱へざらんは詮なく候一向名號を稱ふとも信心淺くは往生し難く候と仰せられました、今正の字を受られた者は宗祖聖人から祝ふて頂くばかりではない諸佛の御讃嘆を得る故に、諸佛讃嘆シタマヘリと結ばれました骨折り乍ら得のない小路にうろ〳〵せずに本願一實の大道に進みませう。

十方諸有ノ衆生ハ
阿彌陀至德ノ御名ヲキヽ、
眞實信心イタリナバ
オホキニ所聞ヲ慶喜セン

偈には諸聞阿彌陀德號、信心歡喜慶所聞、とあり是が此和讃の本據である、此讃の次の若不生者の一首とは離さずに伺はねばならぬ事にて古來此二首を初を聞信慶喜後を卽得往生と科を施してあり、偈では諸と云一字を今は伸ばして十方諸有ノ衆生ハの一句と成て居ります十方とは東西南北四維上下の事、諸有とは御草稿の御左訓にショウハ二十五有ノシユジヤウトイフワレラシユジヤウハ二十五有ニスギテムマルヽトイフコヽロナリとあるによれば廿五有界の衆生を指すお言葉なり、又異譯の如來會には所有と云文字に成てあるより伺へばアラユルと讀みて因願の十方衆生と同じく凡聖善惡の衆生の事となります。

十方諸有ノ衆生ハとは餘所事に聞てはなりませぬ廿五有界の衆生と云中には子

々までも收まりては居樣けれども、本願名號を直接に聞かれる者は無漏の三乘と有漏の二乘にして心得易く申せば菩薩と緣覺と聲聞と天上と人間との五組です、さり乍ら大悲の御腹底を窺ふてみまするとと無漏の三乘がお目的ではありませぬ、如來ノ作願ヲタヅヌレバ苦惱ノ有情ヲステズシテ回向ヲ首トシタマヒテ大悲心ヲバ成就セリ、朝から晩まで八萬四千の煩惱の角振り立てゝ冥より冥に迷ひぬる身を、八萬四千の光明放つ身に仕立上度と云ふがお目的でありますのぢや。

その大悲のお目的成就したのが南無阿彌陀佛の名號であるその本願成就の名號を善知識より聞持して、宿善開發し往生いかゞの思ひなく安堵決定の出來た所を阿彌陀至德ノ御名ヲキヽ眞實信心イタリナバと仰せられたのであります、御名を聞き樣が粗慢では往生一定御助治定の眞實信心にはなれぬから能く〳〵身を入れて聞かねばなりません、信卷に聞くと云ふは衆生佛願の生起本末を聞て疑心ある事なしこれを聞くと云ふと御懇切にお示し下されてあり、又一念多念證文にはキクトイフハ本願ヲキヽテ疑フコヽロナキヲ聞トイフナリマタキクトイフハ信心ヲ

アラハスミノリナリと仰せられてあります。

眞實信心とは虚假不實の信心に簡別してのお言葉なり、御草稿の御左訓にシンハギナラズケナラズギハイツハル反ヘツラウ反シンハカリナラズジチハコナラズムナシカラズとお示しなされて、聊かも無明の迷水雜らぬ大悲純粹の智水を汲み得た信心なる事を現はして眞實信心とあるのです、凡夫不定の迷心を押へて有難かつた尊とかつた位を信心の様に思ふた間は、いつも若存若亡故歡喜も慶喜も有たものぢやないけれども眞實信心いたりなば大きに所聞を慶喜せん何うして喜ばずに居られませう。

御左訓にシンズルコトヲエテヨロコブナリと遊ばした如く阿彌陀至德の御名を聞き不足なき南無阿彌陀佛の主にさせて頂て、茫乎として居られる譯のものでない故にオホキニ所聞ヲ慶喜センとお結びに成たのである、慶喜は今は後念相續の事なれども後續に限るものではありませぬ本願に信樂と說き成就には信心歡喜と說かせらる、依て宗祖聖人は廣大難思の慶心とも慶の言は印可の言なり。獲信の

言なりと仰せられてあります、皆是所歸に屬したものなること明かであります歡喜慶喜同異のお話をすれば、多くありますれども際限なき故只今は共に喜ぶ事として次に移ります。

若不生者ノチカヒユヘ
信樂マコトニトキイタリ
一念慶喜スルヒトハ
往生カナラズサダマリヌ

偈には乃曁一念至心者、回向願生皆得往、唯除五逆謗正法、故我頂禮願往生、とある是が本據です、前に申しました通り十方諸有の前首と一具の和讃なる事はいかなる素人眼でも判ることでありませう、初の二句は上を承け後の二句は正しく卽得往生の現益を知らせて下されましたのである。

我乍ら胸を覗けば恐ろしやねてもさめても鬼の住居場とは曾て拙衲が口占ましたことですが實に我身乍ら愛想の盡き果た心中であるのに、今はこれではいかゞ

の念慮なく一心一向餘念なく大悲の親をたのみ、而も欲願愛悅歡喜賀慶云ふに云はれぬ樂みを持ち大磐石の如くゆり据り動かぬ安心決定は外でない、鬼のまゝ彌陀にまかせよ他力にてほどけにせずばおかぬ本願なる故である、夫で若不生者ノチカヒヱへ信樂マコトニトキイタリと仰せられたのである、此味ひは申せとある方にいつも申し上ますが口に述た位で盡るものではない青筋張て念佛して居ても邪定不定の機類では知ること出來ぬ味です。

御草稿の御左訓にワガチカヒヲシンゼンモノモシムマレズバホトケニナラジトイフコヽロナリと遊ばされ、又第二句の御左訓にコムガウノシンジムナリコノタリキコムガウノシンジムノサダマルトキワアミダ佛ノオンコヽロニカナフトシルベシとお記し遊ばされてあれば、我等が信心獲得しぬれば大悲の御親は深く喜びましますのです、世間でも子の病氣に親が瘠せ子の立身に親が安心安堵したと喜びませう、無始以來迷ひ來りた我等を一度は〳〵と若不生者の誓の大網は張づめで有たそのお慈悲に到頭逃道なく、至心信樂欲生と己れ忘れて無行不成の願海に

歸し奉り即得往生住不退轉、娑婆に居乍ら極樂の戸籍謄本に登つたと云仕合其所を一念慶喜スルヒトハ往生カナラズサダマリヌと仰せられたのである。

一念と云には宗祖聖人のお釋に二樣ありまして一念とは信樂開發の時尅の極促を顯はすとの給ふお釋によれば、信心決定の時を指して一念と申すのであります、又信心二心なきが故に一念と名るとあるお釋によれば、信相にして一心と一念と同じ事である今は双方を含でありものと頂けば宜しからう、而してこの一念上に向へば信樂マコトニトキイタリの一念なり、下に向へば往生カナラズサダマリヌの一念なり、是等の事も他力の味を知らぬものに解る所でありませぬ上に向ふ一念は法體全領の時にして下に向ふ一念は當果決定の時であります。

慶喜の御左訓にシンズルコトヲエテノチニヨロコブコヽロナリとあるおこゝろより伺へば慶喜は相續の喜びに似て居るのに、一念慶喜スルヒトハ往生カナラズサダマリヌと云上へでは初歸に約した慶喜の樣であるいかなる譯であらうと不審の起る所、是は正信偈に慶喜一念相應後とあるに同じく後とは一念同時の後故に

一念慶喜と云は信心歡喜と申すのと同意なれば怪むに及びませぬ、一念の信心は體にして慶喜は相なり相を擧げて體を顯はすのお言葉と頂けば宜しいのである、前の後のと議論は要らぬ若不生者のお誓によりて生るべからざる者を生れさせ給ふと聞て信ぜられたものが同時に喜びがなくてなりませうか。

安樂佛土ノ依正ハ
法藏願力ノナセルナリ
天上天下ニタグヒナシ
大心力ヲ歸命セヨ

本據の偈には安樂菩薩聲聞輩、於此世界無比方、乃至皆是法藏願力爲、稽首頂禮大心力、とあり、安樂佛土とは申す迄もない西方阿彌陀佛のお淨土である、佛土は淨土の異名にして大乘義章十九に佛土と云は安身の處之を號して土と爲すとあるにて明かでありませう、依正とは依報正報のことなり雲棲の彌陀經疏に土は是所依にして依報と名け佛は是能依にして正報と名くとありて阿彌陀佛の願力成就

の報土の寶樹を吹く所の風白沙を流るゝ所の水悉く念佛念法念僧と佛菩薩に齊しき用きを爲す之を法莊嚴と申します、又宮殿の美や樓閣の壯やみな光明ならぬはなし之を事莊嚴と申します是等を名けて依報と云ふ、斯くの如きを所依として以て見ては樂み聞ては樂ますする能依の佛菩薩を人莊嚴と云ひ正報と云ふのであります、今此第一句に是等の總てを安樂佛土ノ依正ハと仰せられましたのである。

御草稿の御左訓にエホウハヨロヅノホウジユホウチヨロヅノカザリナリスベテノカザリノナナリシヤウボウハワレラガゴクラクニマイリナバジンヅウジザイニナルヨイフナリとお記し遊ばされて有て、大無量壽經の感成極樂段に又其國土には七寶の諸の樹世界に周滿せり、金樹銀樹瑠璃樹玻瓈樹珊瑚樹瑪瑙樹硨磲樹あり、或は二寶三寶乃至七寶轉た共に合成せり或は金樹の銀葉華果なるあり或は銀樹の金葉華果なるあり或は瑠璃樹あり玻瓈を葉と爲す華果亦然なり、或は水精樹あり瑠璃を葉と爲す華果亦然なり乃至 此諸の寶樹行々相値ひ莖々相望み枝々相準じ葉々相向ひ華々相順ひ實々相當り榮色光耀勝げて視る可らず、清風時に發り五音の

聲を出す微妙の宮商自然に相和せりと說き給ふ如き卽是安樂佛土の依報莊嚴であります、此樣な結構莊嚴の淨土を所依として能依の位置に立たるゝ身となるが一念歸命の行者ときけば御恩を仰がずには居られません。

斯く廣大なる殊勝なる安樂佛土の依正は誰が御建立なされたかと云ふに法藏願力ノナセルナリと云ふ、第二句を頂けば五劫の思惟永劫の修行と云因位の御苦勞を思ひ浮べずには居れませぬ、電車や汽車に乘て昔十日を經て到着した所へ一日足らずにて早着出來るに付ても「フランクリン」や「ソット」の智惠が感ぜられるでありませんか、我々が善知識の言葉の下に、歸命の一念發得せばその時を以て娑婆の終り臨終と思ふべし、聞信の一念に南とも無とも口に出ぬ先に往生一定御助治定と三祇を一念に超へ衆聖を片言にとゝのふとあるのです、十日を一日の比ではない夫に法藏願力の爲し業を感ぜられぬ道理はなからう。天上天下ニタグヒナシ大心力ヲ歸命セヨと御懇切に御教示なされるを茫乎として聽聞してはなりませんでないか。

天上天下ニタグヒナシと云を偈には正報に約して比類なき有容を顯示してありますけれども、今は依正二報に通じて無比なる事をお知らせ下されたものと伺はれます、大心力とは三十七名の隨一にして紛らはしき事はなけれども御草稿の御左訓を頂けばワガミダニヨライナリと遊ばされてあるので愈々明了になります、歸命セヨとは例の如く申す迄もなしその上御左訓にオホセニシタガフメシニカナフと遊ばしてあれば是亦判然たり。

安樂國土ノ莊嚴ハ
釋迦無碍ノミコトニテ
トクトモツキジトノベタマフ
無稱佛ヲ歸命セヨ

偈に釋迦無碍大辨才、設諸假令示少分乃至 故我稽首無稱佛、とあるが、此讃の本據である、次下の和讃と云ひ今此和讃と云ひ皆是我等が參らせて頂く所のお淨土の莊嚴殊勝なる事のお知らせ、これを拜讀しこれを拜聽する者に淨土を願

ふこゝろの起らぬものがありませうか、いかなるものでも肉躍り神飛ぶの狀あるべきと思ふ。

釋迦如來は四辯八音と申して釋迦無碍を委くは四無碍とて一に法無碍辯二に義無碍辯三に辭無碍辯四に樂悅無碍辯となります、能詮の敎法に通達して法を說くに滯碍なく、今一つ云へば極樂の眞相を間違へずに說き顯はし給ふが法無碍辯である、所詮の義理に通達し法を說くに滯碍なく、今一つ云へば只今聽聞して居れば大悲の親許に居る心地がする樣に信心の智惠に淨土を見せて下さる所詮の妙德ある事を義無碍辯と申すのであり、佛以一音演說法衆生隨類各得解と佛の說法が無量の機類にみな障碍なく通ずるを辭無碍辯と申すのであります、現代で申さば英佛の語に通じて居るとか獨逸語に達して居るとか印度語支那語に達者であるとか、朝鮮や西藏語も出來るとか古代の散斯克栗語及希臘語羅甸語も解るとか云樣に萬能なるお方で有た、一切衆生の樂欲に任せて聞く人の宿善をみて其人々々に應分の滿足を與へ給ふに滯碍なきを樂悅無碍辯と申すのである、左樣な自由自在

の御辯舌を以てお讚め遊ばされてもお說きなされても盡る事のない結構莊嚴なる故に、安樂國土ノ莊嚴ハ釋迦無碍ノミコトニテトクトモツキジトノベタマフと仰せられたのである、斯樣なお淨土を御建立なされたお方を無稱佛と御讚嘆申上るのであるから、早く此佛を歸命して釋迦無碍の御言にて說き盡し給はざる殊勝のお淨土へ參れよと、正因の信心を勸め給ひて無稱佛ヲ歸命セヨと結び給ふのである。

皇居附屬の吹上離宮や芝濱の離宮を拜觀出來てさへ無上の光榮として喜ぶではないか、拜觀の時間は僅かに二時間か三時間であらう、天台の第六祖荊溪大師さまでが諸經所讚多在彌陀と釋籤に申してあれば、淨土正依の大經のみではない一代經敎も亦間接に西方淨土を御讚嘆なされてあるのです、左樣あるべき筈と云ものは、前來お話したる如き四辯八音の釋迦無碍の御辯舌にて四十九年三百餘會に讚め盡し給はざる所のお淨土である、夫を一度拜觀を許されると有ても吹上や芝濱の離宮拜觀に比すべきでないから無上の光榮と喜ばねばならないは當然です、然

るに信の一念にて我等が永劫の住居場とお定め下されたのであると聞て歡喜せずに居れませうか、家屋ありても衣食がなくば滿足はせぬ事なれども萬德圓滿の名號を以て無量壽の食物とし攝取の光明を正定聚の衣服とし、揃ひも揃ふた衣食住彌陀をたのめば南無阿彌陀佛の主になるなり無稱佛を歸命せよと御尤ものお勸めであります。

已今當ノ往生ハ
コノ土ノ衆生ノミナラズ
十方佛土ヨリキタル
無量無數不可計ナリ

偈に十方佛土菩薩衆、及諸比丘生安樂、無量無數不可計、已生今生當亦然、とあるが此讃の本據である、只今最初の句に已今當ノ往生ハと承るや過現未の三世を貫くお話と云事が分る、第二句のコノ土ノ衆生ノミナラズと承るや西より東より南より北より思ふて服せざることなしと云支那聖の昔話ぢやない、東西南北四

維上下横に十方を引寄せ給ふ本師法王のお用きお手際が判然です、斯樣な御繁昌のお淨土は阿彌陀佛のお國であると客觀的に見て居る樣では眞味は知れぬ、是は我等が至るべき永住の國なりと信じてみれば暢氣にすまして居る所ではない、如何なる仕合者ぞと大悲深重の御恩を仰ぎ稱名念佛しつゝ愉快な日暮しをなされる事である、超世ノ悲願キヽショリ我等ハ生死ノ凡夫カハ有漏ノ穢身ハカハラネド心ハ淨土ニスミ遊ブ其はいつであらうと餘所を探すのではない、只今六字の由れを聞く一念に肉體こそ替り目なけれ、心靈は淨土の戸籍に組入れられたのであるから、咲きつゞく花みるたびに猶もまたいと願はしき西の彼岸と蓮如上人のよみ給へる如く心は淨土に往來することになります。

大無量壽經を拜讀すれば佛彌勒に告たまはく此世界に於て六十七億の不退の菩薩ありて彼國に往生せん、一々の菩薩已に曾て無數の諸佛を供養せる事次で彌勒の如きものなり、諸の小行の菩薩及び小功德を修習せんもの稱計すべからず皆當に往生すべし、佛彌勒に告給く但我刹の諸の菩薩等の彼國に往生するのみならず

他方の佛土も亦復是の如しと說きたまひてあります、而して其次に其第一佛を名けて遠照と云ふ彼所に百八十億の菩薩あり皆當に往生すべし乃至 此十四佛國の中の諸の菩薩等當に往生すべきのみならず、十方世界の無量佛國よりの其往生するもの亦復是の如し甚だ多く無數なり、我但十方諸佛の名號及び菩薩比丘の彼國に生ずる者を說んに晝夜一劫すとも尙未だ竟る事能はずと御演說遊ばされてあるに依て只今無量無數不可計ナリと仰せられたのでありませう。

彌陀の淨土の御繁昌なる事は前に彌陀初會ノ聖衆ハ算數ノオヨブコトゾナキと初會より其模樣は表はれて有たのである、宗祖聖人の御遠忌が勤まると聞けば參詣の團體多く詰め掛古今未曾有と驚嘆させた事も有たが、是等は申すも惡けれど罪塊の凡夫の集りぢやから內容には筆舌にし兼る醜態を保持して居たのである、

今の十方佛土ヨリキタル無量無數不可計ナリのお集りは玉や鏡の如き大菩薩が假椽造つた御堂ぢやない瑠璃の大地のお淨土へ往生せらるゝと云ふ芽出度事、他力の門に入らぬ者に合點の出來るものはない所以はその乘込む大菩薩は遠く求む

るに及ばぬ近き信者卽是一心一向彌陀たのむ一念の時攝取せられた正定聚の身の上にあるのです。

阿彌陀佛ノ御名ヲキヽ、
歡喜讚仰セシムレバ
功德ノ寶ヲ具足シテ
一念大利無上ナリ

偈に若聞阿彌陀德號、歡喜讚仰心歸依、下至一念得大利、則爲具足功德寶とあるが此讚の本據である、阿彌陀佛ノ御名ヲキヽとあるは根本の大經では其有得聞彼佛名號と說きたまひてあります、一念多念證文に本願ノ名號ヲ信ズベシト釋尊トキタマヘルミノリナリと釋し給ふは此意である今は御名ヲキヽと聞卽信の義を明示し給ふものと伺はれます。

歡喜讚仰セシムレバとあるは經に歡喜踊躍と說けるものにして聞信の如實をお知らせ下されたのであるから讚仰と云お言葉使ひによれば佛德を讚嘆する事にて

廣くは五念門に通ずる所なれども今は念佛申す事と伺ふて宜しからうと思ひます

功德ノ寶ヲ具足シテ一念大利無上ナリとは經に乃至一念當知此人爲得大利則是具足無上功德と說き給へるものにして、付屬の一念は釋迦如來が彌勒に世帶渡しを爲し給ふに末世の衆生に此無上功德の妙寶を與へよと命じ給ふ所故、一名號に萬善萬行を悉皆具足して一念の所に無上大利の主人となられると云ふ譯を、只今柔かに功德の寶を具足して一念大利無上ナリと仰せられたのであります。こゝらに於て、常に耳馴れた信行不離と云ふ他力の妙味を取出して喜ばねばならぬ所である、何故ならば只今は彌勒付屬の經文に依ての本偈を述べ給ふ和讚故に一念大利は行の一念なれども、正像末和讚の五濁惡世ノ有情ノ選擇本願信ズレバ不可稱不可說不可思議ノ功德ハ行者ノ身ニミテリと云ふ和讚の如きは全く信の一念の上のお釋に成て居ます、蓮如上人は一念ニ彌陀ヲタノミタテマツル行者ニハ無上大利ノ功德ヲアタヘタマフコヽロヲ、和讚ニ聖人ノイハクと信の一念に無上大利の功德の主人とならるゝ事を標して右の五濁惡世の一首を御引用に成てあります。

さて功德寶とは名號の事具足とは法藏菩薩因位永劫の御修行の全體が行者の身に充る故に萬善萬行恒沙の功德一も缺る所なし依て具足と云ふ、一念は前に申す如く付屬の一念なれば行の一念にして一聲と云ふに同じである、一念多念證文に如來ノ本願ヲ信ジテ一念スルニカナラズモトメザルニ無上ノ功德ヲエシメ知ラザルニ廣大ノ利益ヲウルナリと仰せられてある、聞卽信を味へば第三第四の二句はみなこれ現生の益と成て十種の益中至德具足に當るのであります、何と有難きことでありませんか。

タトヒ大千世界ニ
ミテラン火ヲモスギユキテ
佛ノ御名ヲキクヒトハ
ナガク不退ニカナフナリ

偈に設滿大千世界火、亦應直過聞佛名、聞阿彌陀不復退、是故至心稽首禮、とあるが此讚の本據である、タトヒとは漢字に書くときは縱令又は假令或は設と云

字になりますので假設を要するのです、大千世界と申すは一千須彌を小千とし之を千倍にて中千と稱しそれを千倍にて大千と云ふのである、大經には是故彌勒設有大火充滿三千大千世界要當過此聞是經法歡喜信樂受持讀誦如說修行、所以者何多有菩薩欲聞此經而不能得若有衆生聞此經者於無上道終不退轉是故應當專心信受持誦說行と說かせられてある。

遇ひ難くして稀れに遇ひ奉る弘願法を聞き外してはなりませぬ事ですから、是迄未だ有りもせず今後も有らうとは思はねどもたとひ三千大千世界が火原に成ても、其中過ぎ行きて聞くべきであると名號の由れを聞くの至要なる事をお知らせ下されたのである、然うぢやのに只今は火原の中ではない坐蒲團の上に居て善知識より教へを受る仕合何と御恩を忘れてすみませうか、たとひと云ふ假設の上から申せば右述べた通りの次第なれども今一歩踏み込で味はふてみますれば、有りはせねども有たらといふ大千世界の火を過ぎて御名を聞く事ではなく、現在我々の胸の中明ても暮ても燃へ止まぬ火のある事は探し求めずとも實際拒否する事は

出來ないでせう、その燃へ止まぬ火の中胸の内にて一念發起平生業成の信心の蓮をみるのであると云ふ思召なるべしと、宗祖聖人の御尊意に手を衝て感謝仕りませう。

佛ノ御名ヲキクと云ふは前に有た阿彌陀佛ノ御名ヲキヽと仰せられたのと同じく聞其名號の事である、第十八願成就の經文に聞其名號信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國卽得往生住不退轉と說き給ひてあるを、只今佛ノ御名ヲキクヒトハナガク不退ニカナフナリと遊ばされたのである、不退と云ふは永く廿五有に返らざるなりともお釋しなされて有て必墮無間が必得往生に轉換した事、今一つ云換れば鬼になる身が佛になる身と決定したのであるので尋常の道を踏でなる不退ならば一大阿僧祇の時間を經て七萬五千體の佛にあひ、五十二の階級の内四十二を越ねば登られぬ位なり夫が聞信の一念に永く不退に叶ふとは、聞て解つた有難く成たなどゝ云凡夫の手前で算盤の合せられる樣な事柄ぢやない、久遠の阿彌陀佛が五濁の凡愚を愍ませられて此世へ御出現に成た釋迦如來が因位に於て御決算の報

告を成就文にお知らせ下されたと云ふ譯ぢや、御草稿の御左訓にホトケニナルベキミトサダマルナリと仰せられた是が不退の現益である。

神力無極ノ阿彌陀ハ
無量ノ諸佛ホメタマフ
東方恒沙ノ佛國ヨリ
無數ノ菩薩ユキタマフ

偈に神力無極阿彌陀、十方無量佛所嘆、東方恒沙諸佛國、菩薩無數悉往覲、とあるが本據である、神力とは威神力なり大經には無量壽佛威神無極と說き給ひてある、世間普通の俗語に云へば人並ならぬ合點のゆかぬおゑらいお方と申すことです其は誰ぞやとお尋申さぬ先に阿彌陀ハと仰せられました、左樣な阿彌陀佛であるから一切諸佛の世界中大評判で諸佛の有丈がお口を揃へて御讚嘆である、手近き所で釋迦如來の御一代をみれば分りませう初頓華嚴より終圓涅槃まで本師の阿彌を御讚嘆なさるに御熱心なる事が明かである故に、天台で名高き荆溪大師も

諸經所讚多在彌陀と申してあります只今和讚に無量の諸佛ほめたまふと仰せられたは此所以なり、依て根本大經には十方世界の無量無邊の不可思議の諸佛如來彼れを稱嘆せざるはなしとお說き遊ばしてあります、彼れとは紛ふ方なき阿彌陀佛の事故此意を偈には神力無極阿彌陀、十方無量佛所嘆と曇鸞大師が嘆ぜられ、只今は神力無極ノ阿彌陀ハ無量ノ諸佛ホメタマフと遊ばしたのです。

東方恒沙ノ佛國ヨリ無數ノ菩薩ユキタマフとある二句は次の自餘ノ九方ノ佛國モ菩薩ノ往覲ミナオナジとある二句に合併して頂くと、十方世界等の經文にも十方無量佛所嘆の偈文にも符合して分明になります、無數ノ菩薩ユキタマフは他に非ず十方無量の諸佛が阿彌陀佛を御讚嘆なさるゝによりてその讚嘆を聞て彌陀の淨土にゆき給ふのである、元來諸佛讚嘆の意全く自國の菩薩をして彌陀の淨土に往詣せしめんが爲なるによるのであるから、菩薩は佛の御說法を聽聞なされて西方淨土に往覲なさらずに居られぬ樣になるのでありますまいか。

然れば我々が自力雜善に富で彌陀の勅命に背き諸佛の淨土へ參りたる所で、其

國の佛が彌陀のお德を讃嘆なされ畢竟彌陀の淨土へ往詣する事になるのである、夫なら態々回り道する世話やめて直入報土の教示に順ふが得策であるまいか得策であるのないのを云ふて居るには及ばぬでないか、龍樹菩薩や天親菩薩が一大阿僧祇逃げ回りなされたけれども萬行諸善の力もちきれぬのにお目が覺め、一大阿僧祇を棒に振て彌陀の弘願に歸し給ひたお手本があります、宗祖聖人は和讃に像法ノトキノ智人モ自力ノ諸教ヲサシヲキテ時機相應ノ法ナレバ念佛門ニゾイリタマフとお述べに成たは此事である、一大阿僧祇を見切てお仕舞なされた龍天二菩薩の御決行を見たら三十年や五十年仕事片手に居眠半分の聽聞位を捨惜みするには及ばぬでないか、彼是云はず速に十方無量の諸佛が讃嘆し給ふ本師の彌陀に歸し奉り肉體は娑婆に働て居乍ら心は淨土にすみ遊ぶ、正定聚不退の身となりませう龍樹大士にひとしきばかりぢやない彌勒大士を後にするの仕合者南無阿彌陀佛〳〵。

自餘ノ九方ノ佛國モ

菩薩ノ往覲ミナオナジ
釋迦牟尼如來偈ヲトキテ
無量ノ功德ヲホメタマフ

偈に自餘九方亦如是、釋迦如來說偈頌、無量功德故頂禮、とあるが此讃の本據なり、自餘ノ九方ノ佛國モとあるは前に東方恒沙ノ佛國ヨリ無數ノ菩薩ユキタマフとあるに言を續けて東方の一方ばかりではない餘の九方の佛國よりも同じく往き給ふのであると云事にて、自餘ノ九方ノ等と仰せられたのです、大經の金言には於彼東方恒沙佛國無量無數諸菩薩衆皆悉往詣無量壽佛所、恭敬供養及諸菩薩聲聞大衆聽受經法宣布道化南西北方四維上下亦復如是とお說き遊ばし、その次に東方諸佛國其數如恒沙彼土菩薩衆往覲無量覺等の三十行百二十句の偈文を以て御讃嘆なされてあるのを、今は手短かに釋迦牟尼如來偈ヲトキテ無量ノ功德ヲホメタマフと仰せられたのであります。

往覲と云字は往はゆくと讀み覲はみると讀む位は誰知らぬものはないが文字の

解釋が出來たのみでは何の味もない樣です、是は十方の諸佛世界の菩薩方が阿彌陀佛のお淨土を戀しく思ひ阿彌陀佛のお德に向ひて十分の御供養申上んとて、御大典鹵簿拜觀の爲に諸國より京都へ出掛た樣に彌陀の淨土を御見物に入らせられる所故に往覲と仰せられたのでありますと、往覲の御左訓にワウジヤウシホトケヲミタテマツルと遊ばして往を只ゆくと云ふ單純の意味でなくして往生しとなさつた此所が通に違せず而も別を顯はし給ふと云ふ所で、前面から云へば辻拜觀の菩薩の樣なれども後面から伺へば尋常の拜觀ではないのです、大體普通の淨土ならば初地以上の菩薩なれば神通を現じいつでも往かるゝのである、阿彌陀佛のお淨土は然うはゆかぬ何故なれば阿彌陀佛の本願の約束として名號六字の由れを聞信したるものに非ざれば假令彌勒といへども入る事を許さぬ所である、其代り煩惱具足の凡夫でも名號を聞信すれば此身に神通はなけれども、罪深く如來をたのむ身になればのりの力に西へこそゆけと他力の神通にて往生成佛出來るのである、是によりて思へば十方諸佛世界の菩薩方も平生に阿彌陀佛のお德を讃嘆なさるに

只の御讃嘆ではない、最初威神功德不可思議を聞信なされ既に信心歡喜して彌陀の淨土に往生し給ふ德を有して居られたものから、無數の菩薩往き給ふとあらはし給へるおこゝろと伺はれますなんと有難き事であるまいか。

十方ノ無量菩薩衆
德本ウヘンタメニトテ
恭敬ヲイタシ歌嘆ス
ミナヒト婆伽婆ヲ歸命セヨ

偈に諸來無量菩薩衆、爲レ植二德本一致二虔恭一、或奏二音樂一嘆二佛德一、或頭二佛慧照一、世間一或以三天華衣一供養、或覩二淨土一興三等願一、如レ是聖衆悉現前、蒙三八梵聲授二佛記一、一切菩薩增二願行一故我頂三禮婆伽婆一、とあるが本據である、偈には諸來無量菩薩衆とあれども諸來と云ふが前にある東方及び九方より來生し給ふ菩薩を指すことなれば今は十方ノ無量菩薩衆と仰せられたのであります。

十方諸佛の世界から阿彌陀佛のお淨土へ往覲し給ふ菩薩方が身口意の三業をも

て御讃嘆なさるゝ事を十方ノ無量菩薩衆徳本ウヘンタメニトテ恭敬ヲイタシ歌嘆スと仰せられたのであります、徳本とは因より云へば徳卽本にして功徳は佛果を得る本と云の意であり又果より云へば徳は果地の萬徳を指し本は因位の萬行を指し徳を得る爲めの本と云の意であります、けれども何れも通ずる事は無論である事を知らねばならぬウヘンと云は植の字にして是は譬喩であります恭敬と云は自己をへりくだり他をうやまう事です、歌嘆とは詠歌讃嘆の事で恭敬は此所は口業讃嘆なれど廣く三業に通ずるものであります。

龍樹讃に不退ノ位スミヤカニエントオモハンヒトハミナ恭敬ノ心ニ執持シテ彌陀ノ名號稱スベシと仰せられてあるによれば恭敬の二字は我々の御安心と頂かれます、我身は惡き徒らもの自力無功とへりくだります所必ず彌陀他力の法に歸するの心ある者、全く二種深信にして歌嘆するは信後佛恩報謝の務めになります、御左訓にホメホムルナリと仰せられたによれば歌嘆の二字を同樣に御覽遊ばされた樣であれども御草稿の御左訓にはコヽロノウチニホムルヲタントイフと歌嘆の

二字を內外に分釋して、横に並ぶれば身口意の三業竪に重ねれば安心起行になる事をお知らせ下されてあります。

斯樣な思召に伺ひ入てみる時は東方及九方の十方諸佛淨土の菩薩方も彌陀の淨土を觀覽なさるゝ丈の往覲ではない、その內實は不思議の佛智を聞信する一念の時入正定聚の現益を受て往生卽成佛の妙果を得らるゝ事と思はれます、左樣に伺ふて而して振返りてみれば前にある和讃に已今當ノ往生ハコノ土ノ衆生ノミナラズ十方佛土ヨリキタル無量無數不可計ナリと、往覲と云はずに往生と仰せられてあるのと且自餘ノ九方ノ佛國モ菩薩ノ往覲ミナオナジの往覲にワウジヤウの御左訓ある事が愈々明了になります、然うしてみれば往生の因果兩ら他力不思議の特別仕立なるを深く信じて念佛しませう婆伽婆は梵語にして、バカバと稱するのではないバガワと稱すべきである是は衆德至尙の佛名であります、もとより諸佛の通名なれども今は阿彌陀佛を指し給ふのであります。佛地論に六翻あり序乍ら揭げて置きます自在、熾然、端嚴、名稱、吉祥、尊貴。

七寶講堂道場樹

方便化身ノ淨土ナリ

十方來生キハモナシ

講堂道場禮スベシ

偈に聖主世尊說法時、大衆雲集七寶堂乃至 如是功德三寶聚、故我運想禮講堂、とあるが講堂の本據である、又道場高四百萬里、周圍由旬有五千、乃至 音響柔順無生忍、隨力淺深咸得ㇾ證とあるが道場樹の本據である。

上三十二首は紛ふ所なき眞實報土の正報に就ての御讃嘆にして下十五首は是亦怪む所なき眞實報土の依報に就ての御讃嘆なるが中間の今の一首方便化身ノ淨土ナリと、看板掲げてのお示しは異彩を放つと云べきか心ある者にして不審を抱かぬものはなからうと思ひます、依てうか〳〵と通過せずに能く宗祖聖人の思召を味はねばならぬ所何故に常に御嫌斥なされる邪定聚不定聚の參る化土をお勸めなさるのであらうと申せば、是は敢て化土を御勸誘なさる譯ではない化土の御繁昌

なる事を知らせ彌陀の御本意ならぬ化土さへも斯樣に御繁昌である、況や眞實報土の往生は妙土廣大超數限にて七寶講堂の比ではないと彌陀の御本意に背かず速に不可思議尊ヲ歸命セヨと廢立の爲に掲示し給ふものと伺ふ事であります。

七寶講堂とは字の如く七寶を以て造られたる佛說法の堂宇である道場樹とは佛陀の正覺成就し給ふ所の樹にして、道は梵語の菩提にして場は所なり菩提を得るの場所である其所の樹を名けて道場樹と申します、方便化身ノ淨土とは眞實報身の淨土に對して簡ぶもの彼淨影天台等の判釋とは大ひに相違します、彼淨影天台等は彌陀を化身とし極樂を化土と判ずるから、三身中の應身應土とみるのであるが只今は方便化身との給ふは彌陀の淨土を報身報土と判決したる上に於てその報中に更に疑城胎宮懈慢邊地の化を判したまふのである。

十方來生キハモナシとは報土ノ信者ハオホカラズ化土ノ行者ハカズオホシとある化土の行者の數多き所以を示されたもの、講堂と道場樹とは三十七名中の彌陀の別號にして依報を以て正報の名にし給ふのです、近き例を出さば材木商の主人

を材木屋と呼び酒造家の主人を酒屋と稱し居る如く、淨土の依報は皆是法藏願力の所成なるが故に講堂道場樹を彌陀の別號とし給ふは至極の道理と伺はれます、次の超數限には稽首歸命とあれども今は禮すべしとのみあること味はふべしこゝに廢立の意が判然と表はれて居ます。

妙土廣大超數限
本願莊嚴ヨリオコル
淸淨大攝受ニ
稽首歸命セシムベシ

偈に妙土廣大超ニ數限一、自然七寶所ニ合成一、佛本願力莊嚴起、稽ニ首淸淨大攝受一、とあり是が此讃の本據で、七寶講堂の一首とお隣りであるけれども前首は方便化身の淨土の隆盛をお知らせなされ、隆盛ではあるが疑惑佛智の邪定不定の人の往く所なれば畢竟往くべき所に非ずと疑を誡めて下され、今首は天窓から妙土廣大超數限と微妙不思議のお淨土卽因位法藏比丘たりし時粗惡を捨て善妙を取り御建立

下された最勝微妙なる所をお知らせ下され、報土往生の正因をお勸めになるのである前は誡疑にして今は勸信と伺ふて宜しからう。

大經には恢廓廣大超勝獨妙と說き給ひ又は恢廓曠蕩不可限極と說き給ひてある金言皆是只今のお據と伺はれる、世間でも尋常一樣ならぬ言葉に云ひ盡せず筆にも現はし兼る事柄云ひ換れば言亡慮絕の場合に是は妙ぢやと申しませう、天台大師は妙とは不可思議に名くと釋せられてある阿彌陀如來のお淨土は妙です不可思議ですから妙土廣大超數限、その筈と云ものは本願莊嚴ヨリオコル不思議の佛智無漏淸淨の大願心より出來上りたるお淨土故妙土と云はねばならぬ事である、妙は奇妙と熟すれば奇妙の淨土と云もよからう佛法は總て奇妙です華嚴には奇哉佛力難思古今未有と說てあり、廣大超數限とは懈慢邊地疑城胎宮などゝ限りたる化土に對して、究竟如虛空廣大無邊際なる算數の限量を超越したる絕對無限の德を知らせ給ふのである、能成の本願が甚深微妙なる故所成の淨土も甚深微妙なるときは因果の道理でありませう。

清浄大攝受とは阿彌陀佛の事である初に三十七名を掲示せられた中の第廿八番目の佛名にて諸佛中の王光明中の極尊と呼ばるゝ佛名であるもの、無漏清浄の大誓願を成就して十方諸有の衆生に對し餘さず洩さず皆悉く引受て、救濟遊ばすと云手廣き攝取のお引受いかにも清浄大攝受でありませんか、如是十方諸有の衆生を手廣く引受て彌陀同體の佛に爲し給ふ、妙土の依報卽正報の彌陀のお德なる故に清浄大攝受に稽首歸命せよとお勸め下さるゝのであります。

古來清浄は自利圓滿の德にして大攝受は利他圓滿の德なりと云說と又清浄は法性法身にして大攝受は方便法身なりと云說と又清浄と大と攝受とを法身般若解脫の三德に配する說とがあり、何れも學者の說甲乙の評はやめて今は前にお話申した如く諸佛超過の無漏清浄の大願を成就し、十方衆生を廣く引受攝めて救助して下さる佛ぢやから清浄大攝受と申上る事として置きませう。

自利々他圓滿シテ
歸命方便巧莊嚴

コヽロモコトバモタヘタレバ
不可思議尊ヲ歸命セヨ

偈に自利々他力圓滿、歸二命方便巧莊嚴一、寶地澄靜平如レ掌、無レ有二山川陵谷圍一、若佛神力須則見、稽二首不可思議尊一、とあるが本據にして此一首は前の妙土廣大をして益々明了ならしむるもの、これにて眞實報土の結構なる事が目にみえる樣な心地をさせて頂かれます、妙土はもとより依報なれども前にもある通り本願莊嚴よりおこる不思議の佛力にて成就し莊嚴なされたのが妙土なり、依て因位の本願力と果上の威神力とによりて出來たのである諸佛の淨土は御自分の爲の自利成就それが利他に及ぼさうと云のぢやから我々は參り兼るお淨土である、阿彌陀佛のお淨土は元來如來ノ作願ヲタヅヌレバ苦惱ノ有情ヲステズシテ回向ヲ首トシタマヒテ大悲心ヲバ成就セリと、利他を本として出來たお淨土なれば遠慮なく參らせて頂かれますのであります、善導大師は一々誓願爲衆生故と釋せられて彌陀の本願は三世十方の諸佛が手を切た衆生を救ふ目的で御成就遊ばしたのぢやと仰せら

れてあります。

諸佛は自分の自利成就した序に手が伸たらば利他し様と云算段、阿彌陀佛は苦惱の有情を救ひ度と云利他成就遊ばして自利亦諸佛に超てまします故に自利々他圓滿シテと仰せられたのである、諸佛は自利圓滿とは云べく利他圓滿とは云はれない、阿彌陀佛は自利も圓滿利他も圓滿なる故に、自利々他圓滿と云はれます、圓滿と云は缺目のない事は明了です。

御草稿の御左訓にジリハアミダノホトケニナリタマヒタルコヽロリタハシユジヤウノソウジヤウセシムルコヽロエンマンハゼンアクスベテソカズヨキコトニナシテマシ〳〵マンハコヽロノミチタルコヽロナリミヅカラモホトケニナリシユジヤウモホトケニナルコトヲエンマントイフナリと遊ばしてある。

歸命方便巧莊嚴とは偈のまゝにして方便巧莊嚴に歸命すと云事です是も御草稿御左訓にハウベンゲウシヤウゴンニクキミヤフシタテマツルナリと遊ばしてあります、方便と云二字は正直を方と云ひ外己を便と云と、論註にお釋なされてあり

まして云換ればお慈悲と云事になります、今一つ分り易く申せば二利圓滿の淨土を構へ給ふは、平等大悲をもて衆生の爲め〳〵とお仕上に成た事なれば、歸命すべきであると云事を歸命方便巧莊嚴と仰せられたのであります、左様に勝れた所を皆我一人の爲とは何たるお慈悲ぞと仰信すべきであるまいか。

不可思議尊とは是亦三十七名の内の彌陀の尊號であります、コヽロモコトバモタヘタレバと云は二利圓滿の妙土廣大超數限方便巧莊嚴筆舌の及ばぬ不二の山を見て不二の山あゝ不二の山〳〵と讀み、松洲の景色を見て松洲やあゝ松洲や〳〵と俳人の云ひし如く、今は心も言葉も絶へはてぬれば不可思議尊を歸命せよとの仰せ、心も言葉も絶へたる不可思議の妙境界は本願莊嚴より起るその本源は阿彌陀佛の然らしむる所なれば、例の如く本佛に歸して不可思議尊ヲ歸命セヨと勸め給ふのである。

神力本願及滿足

明了堅固究竟願

慈悲方便不思議ナリ

眞無量ヲ歸命セヨ

偈に神力本願及滿足、明了堅固究竟願、慈悲方便不可稱、歸命稽首眞無量、とあるが本據にして今の一首は偈文そのまゝと申して宜しからうと思ふ、神力とは威神力にて根元は大經にあるのです威神力故本願力故滿足願故明了願故堅固願故究竟願故と說き給ふ六種である、お讀經を聽聞する人に力故々々願故々々とあるは誰の事かと尋ねられた事がある、誰の事かとは人を指した言葉と思はれるのかと返問したら左樣ですとの答、友達仲間を呼時に三公八公と申しますから御經にある力公願公とは誰なるやと思ひお尋したとの事、之を聞て抱腹絕倒その滑稽に驚き且我容を改め是は阿彌陀佛の因力果力を顯して下された金言にて、本願力故滿足願故明了願故究竟願故堅固願故の五故は因位の本願力にして威神力故の一は果上の自在神力をお知らせ下されたのであると話して御讚嘆申したことで有た。

因位の御本願が根本と成て我々の樣な凡夫の身が少しも小言云はずにすむ樣圓

滿具足して下さつたのが滿足願なり、報土往生の因も報土往生の果も筋目正しく判然と明かにして下されたのが明了願なり、夫が明かなと云のみちやない咿かも狂ふ氣遣のないが堅固願なり、その筈假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔と到頭成就して下されたが究竟願なり、如是の因力が愈よ果上に顯はれた威神力何處から覗てみても隙きのない、横に十方竪に三世一切群生を引受給ふ清淨大攝受とある親樣の御建立なされたお淨土ちやもの慈悲方便不思議ナリ、凡夫が學問の研究から仕出した事を學智の足らぬ者が不思議ちやなーと云が如き不思議ではない眞無量とあるから分らぬ胸にて計らひ立する自力をやめて、一心一向彌陀に歸命せよと妙土の不思議を本佛の彌陀に歸して眞無量ヲ歸命セヨと仰せられましたのであります、眞無量は申す迄もない三十七名の隨一にして卽是阿彌陀佛の尊號である、眞無量の名を解するに多義ありますが本偈の不可稱より見て佛の慈悲方便は眞に稱量し難ひ心によつて此名を立給ふ事と申して置きませう。

寶林寶樹微妙音

自然清和ノ伎樂ニテ
哀婉雅亮スグレタリ
清淨樂ヲ歸命セヨ

偈に從ニ世帝王ニ至ニ六天ニ音樂轉妙有ニ八重ニ展轉勝レ前億萬倍、寶樹音麗倍亦然、復有ニ自然妙伎樂ニ法音清和悅ニ心神ニ哀婉雅亮超ニ十方ニ故我稽ニ首清淨樂ニとあるが今の讃の本據である。

寶林寶樹とは七寶樹林なる事は申すまでもない大無量壽經に又其國土に七寶の樹ありて世界に周滿せり、金樹銀樹瑠璃樹玻瓈樹珊瑚樹瑪瑙樹硨磲樹或は二寶三寶乃至七寶うたゝ共に合成せるあり等と說き給へり、竹にて造りたる笛や獸皮をもて造りたる太鼓や金にて造りたる鉦鈷や木細工の樂器を合奏してさへ調子の揃ふた音樂には耳を傾けて聽き飽きがないと云ふ、近來はラヂオの流行日本に居乍ら諸外國の音樂や演說を耳にすると雖も皆是器械によらねばならぬ、七寶樹林の衆寶合成から發する所の微妙音は人造の音樂に比すべきものでない事は云迄もな

い事、觀經にも鼓せずして鳴ると說てあるから只今此所に想像して此樣なもの彼樣なものと評する事は不可能であります、諸の衆生苦みあることなし但諸の樂みを受く故に極樂と名くとは阿彌陀經の中に說ける金言疑ふ所は少しもない。

かゝる御仕組は皆是五劫思惟より現はれだのである此樣なお淨土へ生れ度ないものは無からう、生れたくば清淨樂ニ歸命セヨと只今お勸め下されたのであります、清淨樂とは三十七名の隨一にして阿彌陀佛の事です故に御草稿の御左訓に清淨樂をワアミダニヨライと遊ばされてある。

宮商角徵羽の調子揃ふてさへ耳に樂むのであるが自然清和の伎樂にて哀婉雅亮勝れたるは、聽く者の耳には音樂ときくのみならず因果事理の秩序整然たる御說法とも響くのであります、實に筆舌に顯はす事は出來ない筈阿彌陀經を拜讀しましても、諸の鳥の聲が一々說法ならぬはないとの事而してみれば七寶樹林の動く聲亦說法ならぬはない道理、斯樣なお示しは御大典の御盛儀式場拜觀を語り聞かせる樣な思ひちやない、一刻も早く自力定散の域をはなれて大悲の彌陀に歸する

心を發す樣に但受諸樂故名極樂の模樣を知らせ給ふ御深慮故に清淨樂ニ歸命セヨ
と結勸遊ばされたのであります。

七寶樹林クニヽミツ
光耀タガヒニカゞヤケリ
華菓枝葉マタオナジ
本願功德聚ヲ歸命セヨ

偈に七寶樹林周世界、光耀鮮明相映發、華果枝葉更互爲、稽首本願功德聚、と
あるが此讃の本據である、さて七寶の數は一樣でも七寶の品は種類替りて一樣で
ない、經文に說れてある所をみますと七寶に限らず八寶九寶十寶終に百寶千寶無
量寶なる事を推量出來ます、七寶が七の數に止らず無量であるとしてみれば樹林
と云ふも此所に一個林彼所に一個林と云位ではない、樹の多く集合せるを林と名
くるもの故七寶が多くあると云事にみられる、然うしてみますと到る處寶ならざ
るはなしと云事になる、斯く推定して第一句を伺へばクニヽミツと云へる言葉が

眞に適當する事になります事と思ふ。

光耀タガヒニカゞヤケリとは大經にて頂きますと或は寶樹あり紫金を本とし白
銀を莖とし瑠璃を枝とし水精を條とし珊瑚を葉とし瑪瑙を花とし硨磲を實とす、
或は寶樹あり白銀を本とし瑠璃を莖とし水精を枝とし珊瑚を條とし瑪瑙を葉とし
硨磲を花とし紫金を實とす等と說てあり、相互に相映じ相輝て居る模樣が手に取
て見る樣である、只今が只今まで三毒五欲にはまり込で笑ふやら怒るやら夫では
すむとかすまぬとか、思ふ心の中から何も彼もそのまゝに無常の嵐に出會ふので
あるけれども平生業成の身の上なら心は安養の淨土に生れて、右の如き目覺まし
き光耀互に輝く七寶中へ生るのであると聞かばいかなる佛法に御疎遠の人でも聞
く機は起る事と思ふ。

土耳其の皇帝は贅澤にて民の膏血を衣食住に使用し果す爲め冥利に盡て今日は
次第々々滅亡の位地に近付たと云ふ輿論である、予が漫遊の際王宮に御倍食の榮
を得て宮殿及び食器等の美なるに驚きました、夫が皆民の膏血を絞り取た物と思

へば落涙に咽びました事である、安樂淨土の莊嚴は無漏清淨の佛智より成就せるもの故涙は出ても嬉し涙と大恩に對する感涙であるから悲しき事は少しもない、是皆彌陀佛の因位永劫の膏血より成立て我々を待ち給ふ事なれば、早く彌陀の勅命に順へよとお勸めなさるが本願功德聚ヲ歸命セヨの結句であります。

清風寶樹ヲ吹クトキハ
イツヽノ音聲イダシツヽ
宮商和シテ自然ナリ
清淨勳ヲ禮スベシ

偈に清風時々吹三寶樹一、出二五音聲一宮商和、微妙雅曲自然成、故我頂禮清淨勳、とあるが此一首の本據であります、清風とは觀無量壽經によれば八種清風と說て有て八種と云は品の八個と云事ではなくして八方清風と申す意であると伺はれる八方とは東西南北と四維上下の上下を除た八方です八種の清風が七寶樹林を吹きます時はさわ〳〵音のするのぢやない宮商角徵羽の五音を出すのであるから奇妙

でありませんか。

五人六人相寄て調子の揃ふたる合奏はいかなる短氣の人間でも怒りを起す事の出來ぬのみならず心の底からしとやかになるは必定であります、されども合奏故にその中に上手下手の差をみることあるに違ひないが、今は宮商角徵羽自然の音聲なれば其樣な事はない、煩惱の臭氣はなれた無漏清淨微妙の風が威神功德不可思議の七寶樹林に吹き渡り、諸佛菩薩の御說法に勝る微妙の音聲を響かするのなれば心も言葉も絶へはてゝ不可思議尊を歸命せよ、夫婦喧嘩して居る時節ぢやない兄弟爭ひする所ぢやないと早く大悲をたのむべき心を起すべきことでありませんか。

先德はあての違ふて嬉しき事のあるはお淨土へ參りた時であらうと仰せられましたが、いかにも見當違ひの嬉さでありませう、娑婆ではあての違ふて悲ひ事やあてが違ふて瞋恚を燃す事は澤山あれど、あての違ふて嬉しい事は滅多にない、今此八種の清風とあるも宮商角徵羽の五つの音聲とあるも、皆是我々が知れる所

の物に名を借りて仰せられたものにして其實は五つや六つの音聲ぢやない八方や十方に限るのぢやない、無上の誓願力によりて出來上つた無上の妙境界言亡慮絶なれば、早く淨土に往生して清淨勳の彌陀如來を禮せよとお勸め下さるのである、清淨勳は例の如く三十七名の隨一にして清淨は無漏の佛德を指し勳は世の中に勳何等と云勳の字で功勳と熟する文字で働きの顯現したる所である、經に功勳廣大と說き給ひ法藏菩薩の無漏清淨願心より斯樣の妙境界が成就せられたもの故尊號を清淨勳と名け給ひたのであります。

一々ノハナノナカヨリハ
三十六百千億ノ
光明テラシテホガラカニ
イタラヌトコロハサラニナシ

偈に衆寶蓮華盈二世界一、一々華百千億葉、其華光明色無量、朱紫紅綠間二五色一、暐曄爛曜二日光一、是故一心稽首禮、一々華中所レ出光、三十六百有千億、とあるが本

據であります、けれども根本は大無量壽經にありますので大經は横に光明名號の德を廣く說き給ふ所は恰度嚴しき父親と優しき母親とが無事健康に並びたる樣なもの、又竪に信心歡喜せしめ給ふ所は健康兩親の許に同じく健康にして玉を欺く樣な男兒が育つ樣なものです、此大經の上卷に於て智惠の光明を說き給ひ將に智惠の念佛たる威神功德不可思議の名號を說き給はんとする、下卷に移る境目に一々華中出三十六百千億光と說かせられたが今の一首の根本出所であります。

多くの寶の花が多くの光を放つに三十六百千億と云數字に一寸不審が立ちさうである所、これは古來學者が種々の說を辯じてありますけれども、其樣に面倒な事を申さずに今は三十六と百千億とを分けて思召を伺ふてみたら宜しからうと思ひます、華光出佛の經文に青色青光白色白光玄黃朱紫と六色が說てある其六色が六色に互ひに映寫しますから六々三十六となりませう、それを花葉の數の百千億に加へて三十六百千億ノと仰せられたものとすれば彼是議論する程の事でもなからうと思ひます。

如是の光明界は阿彌陀如來御自身の爲めに御成就ではありませぬ設我得佛不取正覺々々と、總じて云へば十方諸有の衆生別して云へば三界苦惱の有情をして安樂土に永住せしめんとの思召に出來たのである、夫にいつまでも平氣に後生を大事に思ふ心もなく世間不急の事のみに東奔西走日も亦足らず、到頭醉生夢死に終る事に成ては遺憾千萬であるまひか、斯かる澁太ひ徒ら者を何處までも追ひ回し一度は〳〵と光明の網を張て下されるに依て善知識の教示を受る事が出來大悲の親なればこそと信順せられるのである、左樣なれば周滿世界と云が淨土ばかりの話ちやない盡十方無碍光如來の御領分は此所も其内と思はれて益々有難く感ぜられます、盡十方無碍光如來に付壯年時代學寮にある頃針の尖程も洩れぬと云文字が盡十方でないか、然に外國は勿論我日本小さな版圖に無碍光如來を知らぬ所少なくないでないか、それに盡十方無碍光如來と云は如何と會讀にて對手を詰責した事がある、判者の說明に依て道理には服して居たるも情に於て納得出來なかつた拙衲外國漫遊の時盡十方無碍光如來を感得し味得せられて嬉しかつた、其はい

かなる譯かと申せば、彌陀大悲ノ誓願ヲフカク信ゼンヒトハミナネテモサメテモヘダテナク南無阿彌陀佛ヲトナフベシの御教示を信行させて頂いて居る自分でせう、印度に在ても南無阿彌陀佛亞弗利加に在ても南無阿彌陀佛土耳其に在ても南無阿彌陀佛英國にても佛蘭西にても南無阿彌陀佛車中にても船中にても、行住坐臥にゐらびなく南無阿彌陀佛を申して居る内フト氣付たのが盡十方無碍光如來、到る處口に稱ふる無碍光如來の御名それを知らず遠き所を探求した愚かさよと嬉しくて飛躍の思ひしたので有た、今は最早昔話と成た事ですがこれ丈でも外遊した德を得たのであると今猶追想しては稱名念佛致すことです。

一々ノ花ノナカヨリハ
三十六百千億ノ
佛身モヒカリモヒトシクテ
相好金山ノゴトクナリ

偈に一々光中有二佛身一、多少亦如二所レ出光一、佛身相好如二金山一、とあるが本據に

て前首は花の中より種々無量の光明を放つ事をお知らせでありましたが、今首は一々の花の中より佛の出給ふ事をお示しである、佛身も光りもひとしくてとは佛が光明か光明が佛か花が光明か光明が花か、黄金の山を築き立た樣なりと云事を相好金山ノゴトクナリとお結びに成たのであります。

經文に衆寶連華周滿世界と說き給へるに就て極樂は池ばかりの國なるやと云俗問がある故蓮華と云へばいつも水蓮と思ふてはならぬ地上にも蓮のある事を知て置ねばならぬ、近來庭園の植木に白蓮と云のがあるを御承知でせう何事も見聞に缺る所があるといらざる不審も起り易い事です、曾て佛は青蓮の御眼と云事を耳にも聞き口にも云ひ乍らその譬喩の適當ならぬに不審を抱て居た、然に印度留學の當時青蓮と云物の實形を見て成程と感心しました、その花の形は直徑二寸足らずにてその色は瑠璃にして光澤最もよく見飽きのない愛らしき花である、是ならば佛の御眼色に比するも適當ならぬとは申されませぬ事が分明になりました、乃で水蓮のみを知て地上の蓮を聞かぬ時は俗問の起るも無理ではありませぬと思ひ

ます。

世界に周滿せる衆寶の蓮華が青色にも青光あり白色には白光あり玄黄朱紫の光色も亦然なりと、六色相互に相映じ相輝き暐曄煥爛として明曜なること日月の如し、六々三十六の光色となり三十六の光色の一つ〳〵が相映じ相輝きぬる相を述べましたら一朝一夕に盡せぬ事でありませう、盡せぬ筈と云ものは先にお話しました通り光明が佛やら佛が光明やら佛が花やら花が佛やら花が說法やら色心不二なり依正不二なり融通無碍の妙用、心も言葉も絶へ果て不思議々々々と仰嘆するより外に道はないのです、其華光出佛の佛々が十方の淨土へ出現して一切衆生を救ふと云ふ、その佛の出現なさる本懷は如來所以興出世唯說彌陀本願海にして彌陀本願を信じて念佛せよの御用向きである、然してみれば今佛願を信ずる身は此所が相好金山の中である愉快でせう。

相好ゴトニ百千ノ
ヒカリヲ十方ニハナチテゾ

ツネニ妙法トキヒロメ
衆生ヲ佛道ニイラシムル

偈に一々又放二百千光一、普爲二十方一説二妙法一、各安二衆生於佛道一、如レ是神力無二邊量一、故我歸二命阿彌陀一、とあるが、今の一首の本據であります、然れども其根源は先の如く大無量壽經にして相好殊特一々諸佛又放百千光明普爲十方説微妙法如是諸佛各々安立無量衆生於佛正道の金言である、相好殊特とは三十二相八十種好の殊勝特別なる事にして微妙法とは名號六字の事、正道とは本願一實の大道であると云事を忘れてはならぬ斯様に決著して置てこの一首を伺ひませう。

三十二相八十種好の特に勝れさせられた諸佛が十方に手を分ち自力に强情な凡夫を本願一實の大道に引き入れ給ふお模様は近く釋迦如來にありとみれば造作はありませぬ、如來所以興出世唯説彌陀本願海と如來の通號を擧させられたも彌陀本願を説くが出世本懷なる事は釋迦ばかりぢやない、過去の諸佛も未來の諸佛も十方三世の諸佛みなこれ同じぢやと云事を含で知らせ給ふのであります。

經文の相好殊特をこゝに相好コトニ百千ノとなされたものとすればコトニは殊に又は特にしても適當であらうと思ふ、乃で本偈の一々又放百千光といへる一々から相好コトニを考ればコトニは毎の字の意にもみえて何れが正當であらうか迷ふ所です、是は殊特の義に見ましたとて敢て邪魔にもなりませんが毎の字の意にみるのが親き樣に思はれます、相好の一々に百千の光りを放つと云ことを相好毎に百千の光りを十方に放ち給ふものと伺ふが至當でありませう。

十方とは東西南北四維上下に相違ないが一々の諸佛が自國を中心として他を十方と爲し給ふのか本佛彌陀土を中心として他を十方と爲し給ふのかと云に、佛々住し給ふ自國を中心として他を十方となさるゝと申すが至當の義と思はれます、十方とは横に場所の廣きを示し常には竪に三世の長きを示し横遍十方竪徹三世いか程逃て隱れ樣とも六字の玉を與へるまでは止まぬと云が佛の慈悲なれば、速に大悲に歸して衆生安樂我安樂小言いらずの身になれよとお勸め下さる思召が含であるものと頂かれます。

七寶ノ寶池イサギヨク
八功德水ミチミテリ
無漏ノ依果不思議ナリ
功德藏ヲ歸命セヨ

偈に樓閣殿堂非二工造一、七寶彫綺化所レ成、明月珠璫交露慢、各有二浴池一形相稱、八功德水滿二池中一、色味香潔如二甘露一、黃金地者白銀沙、七寶池沙互如レ此乃至無漏依果難二思議一、是故稽二首功德藏一、とあるが本據です、大經に七寶の寶池八功德水を說て八功德水湛然として盈滿す清淨香潔にして味ひ甘露の如し黃金の池には底に白銀の砂あり白銀の池には底に黃金の砂あり水精の池には底に瑠璃の砂あり瑠璃の池には底に水精の砂あり珊瑚の池には底に琥珀の砂あり琥珀の池には底に珊瑚の砂あり、乃至 或は二寶三寶乃至七寶うたゝ共に合成せり其池の岸の上に旃檀樹あり華葉垂れ布て香氣普く薰ず、天の優盍羅華曇摩華拘物頭華芬陀利華雜色光茂して水上に彌覆せり、彼諸の菩薩及聲聞衆若し寶池に入て意に水をして足

を沒せしめんと欲すれば水すなはち足を沒す膝に至らしめんと欲すれば卽膝に至る、腰に至らしめんと欲せば水すなはち腰に至る頸に至らしめんと欲すれば水すなはち頸に至る、身に灌がしめんと欲せば自然に身に灌ぐ還復せしめんと欲すれば水すなはち還復すと說き給ひてあり。

八功德水の事は善導大師觀經疏定善義に委くお釋があります一には清淨潤澤是は種々の艶がある德です、二には不臭是は水くさくない德です水に水臭くないとはいかなる譯かと申すに異臭のある水が多くあるものそれがないのです三には輕是は字の如く輕き水である世間にも清水は輕く濁水は重しと申します四には冷これは生まぬるくないことです、五には軟これは舌ざはりよく柔かに呑で居乍ら口中に無きが如しと申す德です、六には美これは味甘く呑み飽かぬ德です七には飲時調適これは身心兩ら適ひて咽ぶの支へるのと云事のなき德です、八には飲已無患これは腹を損せず諸の患なき德です斯樣な事柄を無漏の依果と申すのであります。

七寶寶池や八功德水の事を實際に知る事はお淨土へ參りたる上ならでは分らねども只今頂く身の上に功德藏と云はるゝ阿彌陀如來に歸命して往生一定御助治定と成てみれば、燃る煩惱も苦となさず信心歡喜慶所聞心凉しく日送りの出來る事となるからは八功德水の味も思ひ浮べられ、七寶寶池の詠めも眼前にちらつく樣な心地がせられるのでないか、功德藏とは三十七名の隨一なる尊號にして上來の如きを始めとして悉く萬德を藏せられる所より稱し奉るので、功德藏を歸命せよ歸命する身は不思議の無漏の佛果を得るのであるとの御敎示であります。

三塗苦難ナガクトヂ

但有自然快樂音

コノユヘ安樂トナヅケタリ

無極尊ヲ歸命セヨ

偖に三塗苦難名永閉、但有自然快樂音、是故其國號安樂、頭面頂禮無極尊、とあるが本據である、今一つ本據の本據と云べき經文は大無量壽經に無有三塗苦難

之名但有自然快樂之音是故其國名曰安樂と說き給ふ是なり、三塗は地獄餓鬼畜生の三惡道なる事は皆さん御承知でせう三塗苦難ナガクトヂとあるは經と偖に併せ照せば無三惡趣の願より成就した所に三惡道なきは勿論の事故三惡道の名も聞くことのない所であるとの思召なり、但有自然快樂音とは三惡道の名さへ聞かぬ所ちやもの經に但諸の樂を受く故に極樂と名くと說き給ふ如く、たゞ自然快樂の音のみを聞くのであるからコノユヘ安樂トナヅケタリと受給へるなり、此所に音の字を附してあるのは寶池の水音に約して仰せられたものでありませう。

斯樣に頂きますと遠きお淨土の噂さ話ではない近き眼の前耳の邊りに見へる樣聞へる樣な感じが起りますでせう、三塗苦難ナガクトヂ永く閉ぢの永の字は限りある長の字とは大ひに相違があります、長の字は短の字に對するのですから、六尺より七尺は長ひと云はるゝけれども八尺に向へば七尺も短の部に入らねばならぬ、八十八に成て米字の祝に餅を搗くは長命の人なれども百歲の人に向ふ時は短命の伍に入る事になる、永の字は永代經の永の字の如く幾歲と云年に限りなく寺

の有ん限り無限に讀經すると云ので永代經と名けたのです、若し限りある年を以て讀經するとせば長代經と改名せねばならぬ譯、今此三塗苦難ナガクトヂの永くは無限の意であるから土德に約すれば不退轉地故一度淨土に入る者は永劫迷界に戻らぬ德を表はした思召と伺はれます。

コノユヘ安樂トナヅケタリとは善の字を名に附して有ても惡人があり賢の字を名に附して有ても愚者があり米屋と名乘つゝ米のなき店あり油屋と唱ふる家に油賣らない店ありて名實不相應は迷界の習ひなり、けれども今は三塗の體なきのみならず名も聞かさぬ但受諸樂の妙境界は名實相應なる故コノユヘ安樂トナヅケタリと仰せられたのである、無極尊は例の如く三十七名の隨一にして阿彌陀佛の德名です歸命セヨとは相變らずの御教化彌陀の勅命に信順せよとの御親切なる結勸である。

十方三世ノ無量慧
オナジク一如ニ乘ジテゾ

二智圓滿道平等
攝化隨緣不思議ナリ

偈に十方三世無量惠、同乘ニ一如ニ號ニ正覺ニ二智圓滿道平等、攝化隨緣故若干、とあるが本據である、今首は前首までの讃嘆に振替りて一切の佛々は同じ眞如を證顯して一味平等であると云事を示されました、けれども只夫のみに通過してはなりませぬ何故なれば諸佛所證平等是一に相違ないが總て議論と實行は反對になり易きもので、實行の難ひ聖道諸家の空論に對し願行をもてみれば因緣なきにしも非ず、月と一口に云へば弦月も圓月も月に違ひないけれども唯單に月と云時は陰曆八月十五夜の滿月に限る如く、二智圓滿道平等の月は阿彌陀佛にあるぞと平等の理にはなれぬ所の差別因緣の事を敎へ他人の否應云はれぬ樣にして、而かも差別にはなれぬ所の平等を知らない我々に彌陀の誓願を信行すれば、かくの如き勝れた佛々にひとしく悟らせて下さる攝化隨緣不思議の彌陀をたのめとの思召を一首にお示しなされたのである。

十方三世ノ無量慧とは一切諸佛の事であるオナジク一如ニ乘ジテゾとは同乘一如の相をお述べなされたもの、二智圓滿道平等攝化隨緣不思議ナリとは十方三世の諸佛はみなこれ彌陀の一如に乘じて成佛したまふものにして諸佛の本懷も彌陀の本願を弘むるに在て、他事はないのであるが併所化の機緣に隨ては攝化の方法に差別はあるものなりと示し給ふのであります、十方とは横に約したもの三世とは竪に約したものと云事は通例です畢竟縱横無盡に洩し給はぬと云意味とみれば差支ないのです、一切諸佛を何故無量慧と申すやと云に就て一義に報身は慧をもて體とす故に慧を以て佛を示して無量慧とすると云々此義然るべしと思ふ。

二智圓滿道平等とは御草稿の御左訓にミナサトリタマフコトビヤウドウナリとお記し遊されてあるによれば三界千差萬別の機類を其機々々に應じて、所謂應病與藥のお手の屆く所を權智と申し而して眞如法性は又一如であると佛々平等の境界に居して動かぬ所を實智と申します、斯樣に缺目なく具備してある所を圓滿道平等と仰せられましたのです、攝化とは攝受化益にして衆生濟度の方便である隨

緣とは衆生の機緣に隨ふ事、所化の衆生の機類千差萬別なるが故に能化の佛の應用も亦種々にして敎化の一定せざるを申します、不思議ナリとは本偈の若干を此言に換へ給へるものにて、若干は一の如く十の如く測り知られぬ意なれば今は句調にも叶ふ不思議を用ひ給ふのである、宿善開發の身にて前來の思召を聞くときは何となく三世十方の諸佛と同等の樣な心地がします、心地はすれども煩惱增長の胸中をみれば諸佛同等になられさうにないのである、故に速に彌陀に歸命せよ諸佛同等位ぢやない彌陀同體にさとれるのであるぞとお勸め下さる宗祖聖人の御親切感泣の外はない。

彌陀ノ淨土ニ歸シヌレバ
スナハチ諸佛ニ歸スルナリ
一心ヲモチテ一佛ヲ
ホムルハ無碍人ヲホムルナリ

偈に我歸ニ阿彌陀淨土ニ、卽是歸ニ命諸佛國ニ、我以ニ一心ニ讚ニ一佛ニ、願遍ニ十方無碍

人、如ノ是十方無量佛、咸各至ノ心頭面禮、とあるが今首の本據なり、彌陀ノ淨土ニ歸シヌレバそれが卽諸佛の淨土に歸するのであると云事を句を整へる爲にスナハチ諸佛ニ歸スルナリと遊ばした事は明かであります、今一つ云換れば本師の彌陀の御誓願に洩れず信順出來たものなればそれがそのまゝ一切諸佛に順ひ釋迦の無勝莊嚴の淨土へ往たと同樣なりと申す事、一心ヲモチテ一佛ヲホムルハ無碍人ヲホムルナリとは一心一向に本佛彌陀を讃嘆するのは其儘十方無碍人卽諸佛を讃ると同樣であると申す事、諸佛の事を無碍人と云事は華嚴經に十方無碍人一道出生死と說き給ひて、諸佛は一切の繫縛をはなれて自在を得給へる故に無碍人と稱するのであります。

さて斯樣に一往御文面を伺ひました上に當流の御相承宗祖聖人の持たせられた定規によりて、今一度一佛と仰せられしは何方か無碍人とあるは何方かと云事を伺ひませう、御草稿の御左訓に無碍人にソアミダホフシンノタイナリと遊ばしてある、是に由てみれば法藏菩薩が五劫永劫に願行を成就して正覺阿彌陀と成給ひ

た報身佛は十方一切の衆生を攝化し給ふのである、その無碍光に觸れたるものはみな悉くお引受下さつて諸邪業繫さはりなく邪魔にし給はぬ自利々他圓滿のお方故攝化不思議にてお慈悲も平等お智惠も平等共に無碍なれば眞の無碍人は阿彌陀佛の事ぢやと合點する事が出來る、乃で彌陀ノ淨土ニ歸シヌレバスナハチ諸佛ニ歸スルナリを振返りみれば彌陀本願の招喚を信じて西方淨土に歸しぬれば、それがすなはち釋迦の發遣諸佛の證誠にも叶ふて滿足遊ばす事になるぞよとの思召ちやと云事が分る、一心ヲモチテ一佛ヲホムルハ無碍人ヲホムルナリ、他力の信心を決定してほむべきものは無碍の一道南無阿彌陀佛人格の御主人公は阿彌陀佛なりと、平等にはなれぬ差別の彌陀をお示し下された事が明了になります實に汲めば愈々深しとは此事であります。

信心歡喜慶所聞
乃曁一念至心者
南無不可思議光佛

頭面ニ禮シタテマツレ

偈に諸聞ニ阿彌陀德號ヲ、信心歡喜慶レ所レ聞、乃暨一念至心者、回向願レ生皆得レ往、又は南無不可思議光、一心歸命稽首禮、とあるが今の一首の本據なり、次前の、十方三世ノ無量慧オナジク一如ニ乘ジテゾ二智圓滿道平等攝化隨緣不思議ナリ、彌陀ノ淨土ニ歸シヌレバスナハチ諸佛ニ歸スルナリ一心ヲモチテ一佛ヲホムルハ無碍人ヲホムルナリの二首は、前にもお話申した通り平等に約して結び給へるものにして、そのお心は一にも西方二にも彌陀と偏しはせぬかと他宗より小言を云ひ兼ぬ故夫等の人達の口塞ぎに否應云はれぬ樣遊ばされた御手段仰ぎても尙餘りありと嘆ずべき事であります。

さて信心歡喜等の二首は差別に約してお勸め下さるゝ和讃でありて自力定散の邪定不定の機類は勿論、聖道門の一同にいかにもたのむべきは彌陀如來信心決定して參るべきは安養の淨土なりと、首を傾けて手をつき降參せねばならぬ樣になされたお書振り智惠と慈悲とを兩手にしての御教化なる事明かである。

信心歡喜慶所聞と禮拜を勸るに先立ち假令頭は低く垂れても手は堅く合せても無信の人の禮拜では所詮はないと、信心正因稱名報恩の深旨を表はして已信の人を擧給ひての御敎示である、信心歡喜は成就文の信心歡喜なる事は云迄もない事、慶所聞の三字は信心歡喜の一念に得る所の正定聚の信相を示して下されたもの、前に十方諸有ノ衆生ハ阿彌陀至德ノ御名ヲキヽ眞實信心イタリナバオホキニ所聞ヲ慶喜センとありしと同じ事である、因みに歡喜と慶喜との別を申せば慶喜はウベキコトヲエテノチニヨロコブコヽロナリとありて現益に正定聚となりし事を喜ぶのである、歡喜はウベキコトヲエテンズトカネテサキヨリヨロコブコヽロナリとありて未だ淨土に往生せねども必ず滅度の益を得る事を今より喜ぶ事にて、當益を喜ぶが歡喜で現益を喜ぶが慶喜なり、斯樣に分ると雖も共に一念の信心に具はる益故に次に乃暨一念至心者と仰せられたのであります、乃暨は乃至と同じ是亦成就文の乃至一念なり至心者の者は人者とみるのです。

南無不可思議光佛とは所歸の本尊所禮の佛を擧給ひたので本偈には一心歸命稽

首禮の句を添へて心を主とする歸命、身業を先とする稽首を並べ擧ぐ、已信の行者は心身共に阿彌陀佛に向ふて居る姿を出してある偈文なれども、今は一念歸命の肝要は前二句に十分其意が顯はれてあれば身業禮拜のみを擧て頭面ニ禮シタテマツレと仰せられましたのである。

佛慧功德ヲホメシメテ
十方ノ有緣ニキカシメン
信心スデニエンヒトハ
ツネニ佛恩報ズベシ

偈に我讃ニ佛慧功德音ヽ願聞ニ十方諸有緣ヽ欲レ得レ往ニ生安樂一者、普皆如レ意無ニ障碍一とあるが本據である、四十八首の結讃にして最初彌陀成佛等の三首は法身般若解脫の三德を讃嘆し奉り而して法身の鞘の中から無量無邊無碍等の十二光を取出し、一々主莊嚴に就てお話申し次に彌陀初會の聖衆以來十一首菩薩聖衆の伴莊嚴を讃嘆し給ひしに就てお話を致し、安樂佛土ノ依正ハ法藏願力ノナセルナリの

一首は正報の莊嚴を讃嘆し下依報の莊嚴を嘆ずと云中間に成上起下し給ひ、安樂國土ノ莊嚴ハ釋迦無碍ノミコトニテからは國土莊嚴と云樣に依正二報に亘りて讃嘆し來り、妙土廣大超數限の如きは全く眞實報土の現相を表し、二智圓滿道平等々と差別に離れぬ所の平等を示し南無不可思議光佛頭面ニ禮シタテマツレと平等を離さぬ差別の彌陀一佛に歸し、終に佛慧功德ヲホメシメテ十方ノ有緣ニキカシメン信心スデニエンヒトハツネニ佛恩報ズベシと結ばれました。

宗祖聖人の御自督が教人信と溢れ出て十方の有緣卽我々にお聞かせ下さる事に成たものと頂かねばなりませぬ、然れば我々も亦信心歡喜慶所聞乃曁一念至心者の隨一に成て佛恩報謝の爲めに佛慧功德を讃嘆し奉り有緣の人々に傳へねばならない、信心スデニエンヒトハツネニ佛恩報ズベシ豫て御宗旨の御規定たる信因稱報を以てお結び下されたる御注意隨喜渴仰して洩れずにお受申さねばならぬ。

上來お斷り申した如く俗談平話にて意のある點も書きもらしたることあるを顧み、その申譯なきを恥るのみ南無阿彌陀佛を稱へつゝ筆を閣す。

慈悲深き救ひの親を知りたくば
　　淨土和讃を繙きてよめ
讀み始め彌陀成佛のこのかたは
　　壽命光明はかりなき親
法身や般若解脱の三德も
　　たやすく知らせ貰はれにけり
光明のお德拾へば十二光
　　その上依報正報を知る
味はふて讀めばよむ程有難く
　　尊とくなれる親の大慈悲

昭和六年九月五日　印刷
昭和六年九月十日　發行

著作者　小泉了諦

發行者　京都市油小路通花屋町上ル西若松町　松田善六

印刷所　顯道書院印刷部

發行所　京都市油小路通花屋町北入　顯道書院
電話下⑤二八八六番
振替大阪二三四九番

不許複製

法の園編輯主筆
龍谷大學教授 藤永清徹師編

四六版五百餘頁 定價壹圓五拾錢
總クロース洋本函入 送料拾貳錢

最新刊

現代名家新說話

何人も讀め！斯界の權威者がその卓見を披歷した一大名著

內容要目

信仰と生活……前龍大教授 小山法城師
眞宗將來の進路……龍大教授 龜川教信師
家庭の光……布教研究所長 內田晃融師
社會問題一班……龍大教授 藤音得忍師
少年少女日曜のお話……椰陰 小泉了諦師
歎異鈔の第九條を拜誦して……前龍大教授 梅原眞隆師
現世利益和讚講話……龍大教授 雲山龍珠師
正意の安心に就て……龍大教授 日下大癡師
眞宗入門……龍大教授 西谷順誓師
信仰と道德……相愛女專校長 大野開藏師
現代思想と聖德太子……前龍大學長 弓波瑞明師
眞宗の祈禱觀……龍大教授 杉木榮朗師
阿彌陀如來の信仰に就て……元龍大學長 鈴木法琛師
花雲の奧を尋ねて……前谷大教授 安藤州一師
教典に現はれたる佛陀の精神……行信教校主 利井興隆師

佛教の原理と眞宗の教義を網羅せる諸大家の巨著成る堂々五百餘頁現代佛教名家の十五全篇は教界の一大維針盤であり思想界の一大光明燈である佛教信仰の光此の快著より出づ、前田慧雲師外諸名家の題字書は錦上更に花を添へ、此の內容此の美裝此の超特價三拍子揃つた實に近來稀なる名著である。

發行所 京都市油小路通花屋町上 振替大阪二三四九番 顯道書院

大行寺信曉師著

四六版五〇〇頁總かな付
箱入總クロース洋本 定價壹圓五拾錢
送料拾貳錢

五帖一部 御文章講話

超廉價版

何人も朝夕に拜讀する御文章の講話これこれ佛教が誇るべき寶典！

我が淨土眞宗に於て、蓮師の御文章ほど平易に懇ろに、他力の安心を、眞宗信者としての生活態度を、說きあらはされたものは他に其比を見ない。そして大行寺師のものせられたるその講話は實に斯界稀有の好著である。蓮師の御文、大行寺師の註釋是に加ふるに此の廉價、是非共一書を備へられる樣心からお薦めする。

發行所 京都市油小路二花屋四町九番 振替大阪三番 顯道書院

新らしき説教の快著出づ

特選布教使
説教大家 岩橋行言師著

四六版四号總ルビ付
二百二十余頁美本

執持鈔説教

最新刊

布教の大家、説教の名家岩橋行言師の最も得意とせらるゝ執持鈔説教第一章より第五十章盛られて本書にあり。譬喩因縁訓歌滑稽等一々合法結辯を付し、其の妙辯快説教材優秀の點は古今獨歩にして、先づ教家の資料に、信者の伴侶に無二の良書である。

定價 金六拾錢
送料 金六錢

發行所 京都市油小路花屋町上ル 振替口座大阪二三四九番 顯道書院

終